

50530

教科書文庫

5
810
45 1948
01304 49613

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

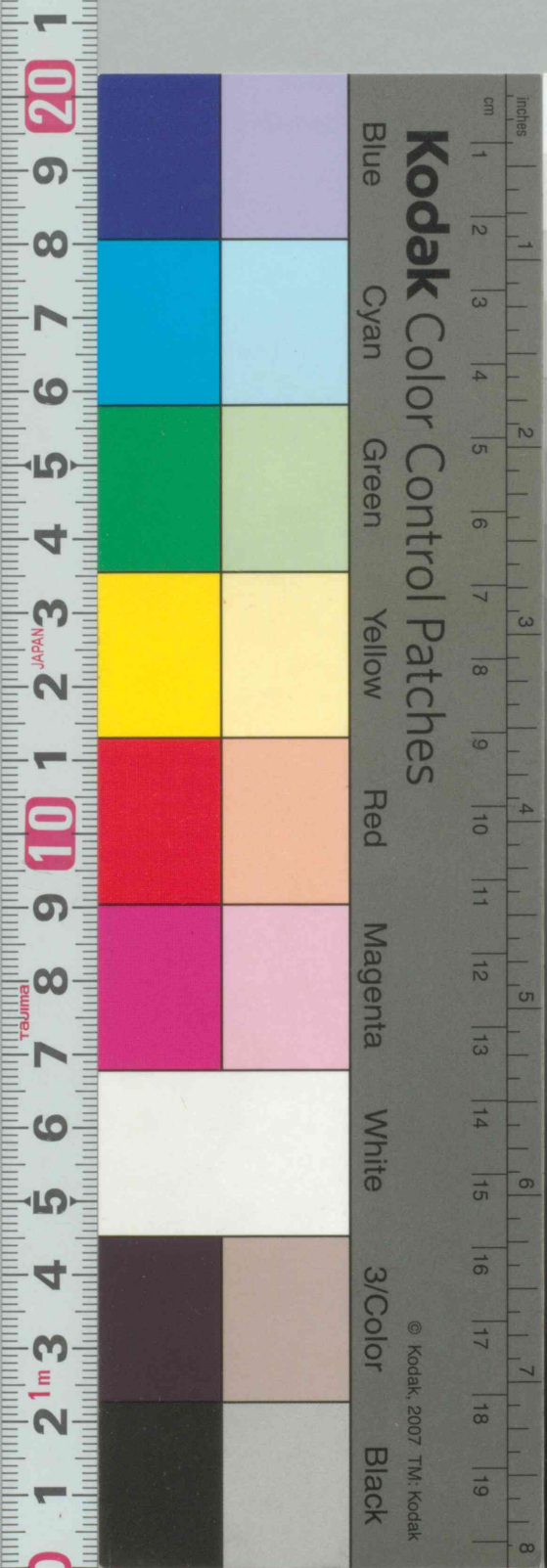


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省検定済教科書

私たちの國語

一下

廣島師範學校附屬中學校



新・新・新

目次

一 はっきりしたことば……………一

二 日常語の反省……………九

 〔一〕 兄弟……………十一

 〔二〕 峠の茶屋……………十七

 〔三〕 現代語の語感……………二十三

三 感想のまとめ方……………二十七

 〔一〕 水害の話……………二十九

 〔二〕 月光の曲……………三十五

 〔三〕 一ふさのぶどう……………四十二

 〔四〕 はだかの王様……………五十三

四 質問と解答……………六十二



〔一〕 私たちのちえ袋……………	六十三
五 文章の作り方・なおし方……………	七十二
〔一〕 文章私感……………	七十四
〔三〕 写生……………	八十
〔三〕 うさぎのみ……………	九十
〔四〕 句読点……………	九十六
六 編集と学校生活……………	九十九

広島大学図書

0130449613



一 はつきりしたことば

中平 解

ことばは、われ／＼の氣持や考えを相手に伝えるためのものである。したがって、われ／＼がものを言ったり書いたりする時、口から出ることばや紙に書かれることばは、はつきりと自分の氣持なり考えなりを相手に伝えるものでなければならぬ。もしわれ／＼の使うことばがはつきりしないで、あいまいなところがあれば、相手の人、すなわち、われ／＼の話を聞いた人、われ／＼の文章を読んだりする人は、われ／＼の氣持なり考えなりを、われ／＼が言おうとする通りにつかむことができないうことになる。それでは、ことばは十分な働きをしたと言えない。せっかくことばという便利なものがありながら、使い方が正しくないために、その便利さが弱められることは、考えてみれば惜しいことである。

このように、ことばはわかりやすく話されたり書かれたりして、はじめてことばとしてのねうちができるわけであるが、それは理想的なことばが用いられた時にはじめて見られることであって、実際には、なか／＼理想通りにいかないのが普通である。ことばがあいまいでなく、はつきりしているためには、ことばを使う人の頭がはつきりしていなければならない。自分の言おうとしていることをはっきりつかんでいるということが、その人の口やペンからほとばしり出ることばを、はつきりとした、あいまいさのないものにするのである。ちょっと考えると、自分の言おうとしていることをはつきりつかむということは、だれにでもできることのようにあるが、それがなか／＼できにくい。

一 はつきりしたことば

一

人間の感情というものは、きわめて複雑なものであるから、その細かい氣持をすみからすみまで細かにとらえて、これを細かに言い表わすということは、すこぶるむずかしいことである。極端に言うると、どのようなことばを使っても、複雑なニュアンスを持った氣持をそっくりそのまゝ相手に伝えるということは、不可能なことかもしれない。ある場合には、かえってことばに表わさないことによつて、いつそはつきりと、相手の胸に自分の氣持を伝えることができることもある。これは、われ／＼がいろ／＼な場合に、身をもつて経験する事実である。

われ／＼がはっきりつかむことのできないものは、感情だけではない。頭の中に浮かんでいる考えをつかむ場合でも、その考えがはつきりとまとまらないために、これを正確につかむことのできないことがよくあることも、われ／＼が平素よく経験するところである。われ／＼の頭の中にあるものは、たとえ論理的に動いているものであつても、数学のように、正確に、なんのあいまいさもなく組み立てられているものではない。学者の非常にもみつな考えの場合などは、数学的正確さに近いと言えるであらうが、それでも数学のようにはいかない。

このように、不確かなものを言い表わすのであるから、われ／＼のことばが、どこかにあいまいさを持つということは、嚴密に考えれば、やむをえないことかもしれない。しかし、その不確かさを不確かなまゝにつかんで、そのまゝ、言い表わすことができれば、そのことばは、はつきりしているといふことができよう。だが、不確かなものを、ありのまゝに言い表わすことのできる人は、はなはだ少ないのではないかと思う。ことばにこうしたためいせきを要求することは、あるいは無理なことかもしれない。

これほどきびしく考えなくても、自分の感情なり考えなりをはっきり言い表わすことは、なか／＼むずかしい。しかし、平生からはっきり言い表わすように努力していれば、それがいつの間にか習慣となつて、どんな場合でも、はっきりしたことばを使うようになるのではないかと思われる。

自分なども、あまりはっきりしたことばを使うことのできない人間であるが、これは、一つには自分の頭がよくないためであるとともに、今一つは、なんとなくはにかむ癖があつて、いろ／＼な場合に、自分の頭の中にあるものをそっくりそのまゝ、外へ出すことをためらう氣持になることがあるためである。これはよくない癖であると自覚しているのであるが、なか／＼なおらない。したがつて、めいせきな頭を反映しているめいせきな文章に会うと、何か救われたような氣がする。子規の書いたものとか、漱石の文章などに触れると、何か自分の病が快癒したような喜びを感じる。鷗外の作品を読んで行くうちに感ずる喜びも、確かなものに触れたところから来る喜びであらう。はつきりとした話の方をする人に接した時に感ずるあの明かるい樂しさも、同じ理由にもとづくものであらう。話のうまい人は、ことばを口から出しながら、それによつて考えをまとめて行つていふような感じがするが、自分などは、むしろことばがなんとなくじやまになつて、考えがまとまらぬといったようなところがある。

今からもう十二、三年も前のことであるが、漱石の「ガラス戸の中」を読んだ時、急に自分の頭がめいせきになつたような錯覚に襲われたことがある。これは、漱石の文章がめいせきであるからである。このような氣持を起させる文章というものは、そうあるものではない。

自分が今こゝに書いてある文章は、その逆であつて、読者は、急に自分の頭が悪くなつたような錯

覚を起すのではないかと思う。

「めいせきでないものはフランス語でない。」ということばがあるが、必ずしもフランス語はすべてめいせきであるとは限らない。すいぶんわかりにくいフランス語の文章もある。めいせきなフランス語の文章に接すると、自分のフランス語の力が急に増したような気になり、何か、自分とその文章との間になんの隔てもないように思われて来る。ところが、めいせきでない文章に対すると、自分のフランス語の力は、赤ん坊のようにおぼつかなく、頭がどうかしたのではないかという心細さをおぼえる。フランス語はすべてめいせきであるとは限らないことは、少しフランス語の文に接したことのある人には、だれにでもわかることと思うが、フランス語の多くはめいせきであるという印象も、フランス語の本を読む人の多くが受ける印象ではあるまいか。めいせきな文章を書き、めいせきなことばを話す人の頭脳がめいせきであるところから考えて、フランス人の頭脳はめいせきであるということが言えると思うが、同時にかれらは、自分の感情なり考えなりを、相手に十分理解してもらうために、行住坐臥、絶えず心を勞しており、しかもそれが、先祖代々フランス人の習慣となつてゐるために、いつしかかれらのことばは、比類のないめいせきさを持つて來たのであろう。

「ローマは一日にして成りしものにあらず。」文化的に價値のあるものは、すべてみな長い／＼時間をかけて形成されたものであるが、フランス語のめいせきということも、決して一朝一夕にできあがつたものではない。実に測り知ることのできないほど大きい努力の集積の上に、この美しい仕事はできあがり、また現にできあがりつゝあるのである。

フランス人が、自分たちの國語を愛することがいかに深いか、こゝにそれを証する一つのエピソードがある。

「一体、フランス人は非常に話好きな國民であり、したがつて、好きこそもののしょうすなれで、話のうまい國民であります。私は当分リオン大学で勉強するつもりでしたから、リオンに着くと、直ちにしろりと下宿に落ち着くことになりました。

宿の主婦は、もう五十近い未亡人でしたが、若い時分には、リオンの音楽学校でピアノ科と声乐科を首席で出たほどの才媛えんだったのです。十五歳になるシャルルという男の子と、マルトという十三歳の娘との三人暮らしでした。ある夕べ、われ／＼は食後の雑談にふけてゐると、主婦がにかにまじめな顔つきになつて、しみ／＼と私に言いました。『このごろ、シャルルやマルトの話すことばを聞いてゐると、私たちの若いころのフランス語と比べて、著しくがらが悪くなり、格がぐすれてゐるのが堪えられぬほど耳ざわりだ。今の若い者がこんな下落した國語を話すようになったのも、欧州大戦以來のことだ、各國兵の塹壕生活が各國語を侵しあつたのが、おそらく最大の原因であらう。娘のマルトもやがては嫁にやらなければならぬが、御承知の通りの貧乏世帯では、目ばしい物を持たせてやるわけにもいかぬが、せめて娘のことばだけはりつぱなものにしてやりたいと思う。それが私から娘への嫁入りじたくなのだ。』

私は主婦の述懐を聞いて、日本の母親の中に、娘の嫁入りじたくに正しい國語をもつてする者が幾人あるだろうか、と考へざるをえませんでした。数日後、マルトは、隠退した女優のところへ通い、シャルルは、小学校の女教師について、正しく美しいフランス語を取りもどすために、國語の鍛錬をやりはじめたのです。』

これは、辰野隆先生の、「フランスかたぎ」という講演の一節である。先生は、更に語を継いで、次のように言われている。

「フランス人はフランス人どうして、あいつのフランス語はへただとかじょうずとか批評をしています。また、われ／＼のフランス語の誤りを一々氣をつけてなおしてくれるのが自慢のようです。國語を正しく美しく話すのに神経質であり、ことばの價値をよく心得ているのです。日本は昔から『言靈のさきはふ國』といわれておりますが、同時に『言あげせぬ國』という制限を一方から受けているようです。しかるに、フランスは昔のゴール人以來、『言あげする國』で、且つ『言靈のさきはふ國』なのです。

フロベールの短編、『エロディヤス』の結びの一句に、切られた予言者ヨカナン之首がすこぶ重かつたので、三人の男が『代わる代わる』持つて行ったとありますが、その、『代わる代わる』という副詞に思い至るまでに、フロベールは幾夜も苦吟したと傳えられています。一体、フロベールの制作は、單に『エロディヤス』に限らず、初期の『聖アントワニス』から最後の『ブヴァールとベッキュシェ』に至るまで、完全な表現を求める苦吟の連続といつても、過言ではありません。それが愛するたゞひとりのでしモーパッサンに、『林の一本の木を描写しようと思つたら、その一本が他の多くの木と全く違つて見えるまで、凝視し、観察せよ。』と教えました。その教えの中には、表現的確、言語の價値に対する嚴たる態度が十分にうかがわれるのであります。」

われ／＼の理想とするところは、わが國の文化を世界的水準にまで高め、更にある領域では、世界の水準をぬき込んで、これによつて人類の平和と進歩に貢献することであるが、そのためには、われわれは、まずめいせきに考え、めいせきに表現することを学ばねばならない。さいわい、このたび漢字が制限され、かなづかいがある程度合理化され、日本語が平易であるとともに、美しいものとなる基礎が與えられたから、この好機をとらえて、日本語をめいせきな表現に堪えるものとなるように練りなおし、その結果できあがつた新しい日本語を自由に驅使して、われ／＼の文化が世界に光を放つようにしなければならぬ。

めいせきな頭腦からめいせきなことばが流れ出るとともに、めいせきなことばは、めいせきな頭腦を産むことを思う時、われ／＼は、われ／＼の國語をめいせきなことばにしたい望みを激しく感ずる。日本語をはっきりした表現に堪える美しいことばにするには、國民全体の協力を必要とする。少數の識者がどれほど努力してみても、國民のひとりひとりが、このことの重要性をはっきりつかんで協力しない限り、われ／＼の口やペンから流れ出ることばは、めいせきで美しい響きを持ったものとはならないであろう。

どのような瞬間にも、あいまいな、濁つたことばを使わないよう、國民のひとりひとりが心がけるようになれば、日本語が、正しく、美しい、そして澄んだことばになることは疑いない。しかし、このことは言うべくしてなかく／＼行いがたいことである。やはり、知識階級といわれる人々がまずこれを実行し、やがてその運動が、波紋が広がるように四方に廣がつて、社会のすみ／＼にまでこの精神が徹底することになるのではあるまいか。

この意味からして、学校とか新聞雑誌とかラジオなどの持つ使命は、非常に大きいということができる。これらのものに、この自覚があるとなんとは、結果において非常に大きな差異ができて来る。し

たがって、学校の先生とか、新聞記者とか、雑誌の執筆者とか、ラジオの放送者などの使命は、はなはだ重いといわねばならぬ。同じく種々の書物の著者たちも、自分の書くことばが、読者のひとりひとりに目に見えぬ大きい影響を興えることを考えて、一字一句もおろそかにせぬように心がけてもらいたい。これらの人々が、すべてこうした慎重な態度に出て、毎日、目に見えぬがしかし深く大きい影響を一般大衆の上に興えて行けば、十年、二十年と時間がたつて行くうちには、われわれの日本語も、見違えるほど美しい、めいせきなことばとなって行くであろう。

そうならば、めいせきを欠き美しさを忘れたことばを、話したり書いたりする人は笑われるようになり、娘の嫁入りじたくとして、正しく美しい日本語を学ばせようとする親も出て来るようになるであろう。

日本語を離れて日本國はなく、日本語の正しい發達なしに、世界に誇るに足る日本文化の進歩發展はないから、われわれは、どこまでもこのことばを愛し、このことばをもち立てて行かなければならぬ。正しく美しい日本語の根の上に、すく／＼と伸びて行くすぐれた日本の文化は、世界の文化に大きな貢獻をするようになるであろうし、またせひとも大きな貢獻をするようにして行かなければならぬ。なんとすれば、世界の文化に大きな貢獻をするような文化をつくり出すことができなかつたらば、われわれの國は、地球の上に存在する意味を持たないからである。

(雑誌「國語の教育」)

研究

一 ことばはわれわれの生活にどういう役目を

果たしているか。

二 「口から出ることば」「紙に書かれることば」は、ほかにどんな言い方がしてあるか。

われの話しぶりや作文の書きぶりによって反省してみよう。

三 作者は、「話のうまい人」をどのように感じているか。

四 「めいせきな頭脳からめいせきなことばが

流れ出るとともに、めいせきなことばは、めいせきな頭脳を産む。」という意味をよく考えてみよう。

五 「正しく、美しい、そして澄んだことば」とはどういうことばであろうか。

六 ことばをよくするのは、少数の人の努力だけでよいであろうか。

七 ことばや文章がはっきりしていることと、頭のはっきりしていることとの関係を、われ

二 日常語の反省

朝、目をさましてから、夜、床について寝るまで、私たちの毎日毎日の生活は、常にさまざまのことばとともに行われている。家庭での生活——そこでは、父母・祖父母や兄弟

姉妹との間に、うちくつろいだことが親しく話されている。また、時おり訪れる親戚知友のだれかれとの間にも、心からのあいさつのことばがとりかわされる。学校での生活——そこでは、先生と生徒との間に、親密なことばのやりとりが行われ、友だちどうしの間では、うちとけたことばがとりかわされる。また、道を歩いている時とか乗り物に乗っている時、私たちは人から道を聞かれ、駅の名まえをきかれれば、これに答えてあげるし、ある場合には、私たちから人に尋ねることもある。このように、私たちは、毎日毎日、いろいろな人と、いろ／＼な場所で、いろ／＼なことがらについて、いろ／＼なことばをとりかわしながら、一日一日を過ごしているのである。

さて、私たちが何かものを言う場合を反省してみると、それはいつもだれかがだれかに、何かについて話をするのである。つまり、ことばというものは、それを言う人すなわち話し手と、それが言われる相手の人を含めた場面全体と、それによって表わされることがらとの三つのものから成り立っているのである。話し手および聞き手が男であるか女であるか、おとなであるか子供であるか、親であるか子であるか、兄であるか弟であるか、姉であるか妹であるか、先生であるか生徒であるかなどの違いによって、ことばの姿も違って来る。また、あらたまった場所でのことばと、親しい者どうしのうちとけた場合のことばとは、同じことがらについて話されるにしても違った姿を呈する。このように、聞き手を含めて、そのことばが話される場面全体によっても、ことばの姿は変わって来るのである。また、話されることがらの違いによって、ことばが異なって来るのはいうまでもない。

私たちの毎日毎日の生活から、ことばを除外して考えることはできない。誤りのない正しいことばの使い方をすること、それはわれ／＼の生活を正しく豊かにするのにどれほど役立つであろう。ことばの正しい使い方に習熟していなければ、十分りっぱな社会生活を営むことはむずかしい。われ／＼が毎日毎日無意識のうちに過していることばの生活——そのことばの中には、常に正しい理法が働いているのである。その理法というものは、結局、話されることがらと、話し人と、聞き手を含めてそのことばが話される場面との三つのものによつて制約されているのである。私たちは、ことばの正しい使い方に習熟しなければならぬが、それには、まず毎日毎日無意識に使っている私たちのことばに反省の目を向けることから始めることが最もてつとりばやく、また確かな方法である。その場合、常に話されることがらと、話し手と、話される場面と、この三つのものによつてことばがいかに異なった姿を呈するかということに注意することがたいせつなのである。

次にあげた文章で、具体的に日常語の反省を試みよう。

「一」 兄 弟

山本 有三

「にじさん、これ、そうだろう。」

「どね。」

兄はそばにいる弟の方を振り向いた。そして、弟のさし出したきこを見た。しかし、すぐ言った。「それは違うよ。こういうんでなくっちゃ。」

かれは、自分で今とったばかりのはつたけを、弟に示した。
「これ、だめ。」

弟は残り惜しそうに、とったきのこをながめていた。

「あ、かさの下にぎざぎざのないのはだめだよ。へびたけてね、毒のきのこなんだよ。」

かれは、まだ十一の少年だけれど、弟に対する時は、さすがに見らしい落ち着きと、いたわりとがあつた。

弟が少ししよげているのを見ると、かれは氣の毒になった。それでポールーバンのような色をしたはつたけの頭を見つけると、すぐに弟に教えてやった。

「真ちゃん、そこにあるよ。」

弟はそれを聞くと、元氣づいてそこらを見まわした。しかし、白茶けた落ち葉のほかには、なんにも目にはいるものはなかった。兄は重ねて言った。

「そら、そこにさ。真ちゃんの足もとのところに。」

「どこに。」

「これさ。」

と、兄は弟のそばに寄って来て指さした。

「葉っぱでわからないんだもの。これ。」

弟は落ち葉を拂いのけて言った。

「あ。」

「毒たけじゃない。」

「うゝん、これがほんとはつたけだよ。」

「ぼく、とってもいい。」

「いいとも。」

弟はかゞんではつたけを抜いた。しかし、不氣味な虫でもつかんだ時のように、あわててきのこを放してしまった。

「なんだって捨てつちまうの、真ちゃん。」

兄はなじるように言った。

「だって、こわいんだもの。」

「何がさ。」

弟はうつむいたまゝだまっていた。

兄のくちびるには、微笑が浮かんで来た。

「あゝ、きのこの色が変わったんで驚いたんだね。なあに、そりゃ、なんでもないんだよ。はつたけは、さわるとすぐ色が変わるんだよ。」

「じゃ、だいじょうぶ。」

「だいじょうぶさ。」

弟は、やっと安心したというふうであつた。

「もったいない。こん中へ入れときよ。」

兄は、ざるの代わりに、地上に裏返しにして置いてある自分の帽子をさした。弟は拾ってその中へ入れた。それから、ついでに、兄がとった、帽子の中のきのこの数を数えてみた。

その間に、兄は落ち葉をかさつかせながら、あっちこち、はつたけをあさっていた。兄が目ときよろきよろさせている様子は、ちょうど、朝おばあさんが背中をまるくして、ふとんの上のみを追いかけるかっこうとよく似ていた。弟はそれを見ると、わけもなく、うれしい氣持になって来た。そして、自分もまたすぐに背中と目だまをまあるくして、たけ狩りをやりだした。もちろん、弟は兄の四半分もとれなかつたけれど、松林の中をばねまわって歩くことは、なんととっても、かれには愉快でたまらなかつた。

突然どしいんという響きがした。兄がふいと目を上げると、一間ばかりさきの、少し傾斜になってある地面の上を、弟はころ／＼ところがっていた。おそらく、木の根か何かにつまづいたのだろう。はずみをくらって、ころがりだしたものらしい。それを見ると、兄は思わすふきだしてしまった。弟が目の前で倒れたのだから、すぐにもかけて行って、起してやるのが当然のだが、その瞬間には、「弟」とか「起す」とかいう考えは、まるでなかつた。それどころか、手を打ってはやし立てたいような氣持でいっばいだった。しかし、次の瞬間には、もう、弟のそばにいた。そして、木の根かたでとまった弟のからだを引き起した。

その時のかれは、いたわり深い兄であつた。かれは心配にふるえながら、弟をかいほうした。ところが、弟は、起き上がると、兄の顔を見るなり、にやりと笑つた。すると兄の顔もまた、ひとりでにほおえんでしまった。泣きだすと思つた弟が笑つたものだから、兄は急に氣が軽くなった。

弟は、起き上がるとすぐに笑えたくらいだから、どこもけがはしていなかった。しかし、かれの笑いは妙ちきりんな笑いだつた。もちろん、しくじりをやつたあとの、てれかくし笑いに相違ないのだが、それにしても、どこか変なところがあつた。よく見ると、それは弟の右のほつべたにした、か、どろがついていたからだつた。おそらく、倒れた時にくつついたものだろう。兄はそれを知ると、すぐに指でどろを落してやつた。けれども、よく落ちないので、筒そでの中に手を引っこめて、それでほつべたをこすつてやつた。ところが、それでも、すつかりきれいにならないものだから、今度は、かれは、筒そでの先につばをくつつけて、ていねいにふいてやつた。その間、弟はおとなしくして、兄のやつてくれるまゝになっていた。

それから、ふたりはまたたけ狩りをやりだした。

しばらくしてから、兄ははつたけでいっばいになっている帽子を取り上げて、得意そうに言った。

「眞ちゃん、こんなにとつたよ。」

その時、突然、うしろで大きな声がした。

「やい、それを持つてくことはならねえぞ。」

ふたりはびっくりして、その声の方を見た。うしろに、山番のじいさんが立っていた。かれは待ちかまえていたといわぬばかりに、振り向いた少年の手から、きのこのはいっている帽子を取り上げた。そして、いきなり兄の横つらをつらをつら、なぐりつけた。

「ふてえ野郎だ。」

しかし、年上の少年は泣かなかつた。たゞ顔をまっかにして、首をうなだれただけだつた。ところ

が弟の方は、自分になぐられたのではないけれど、急に「わあっ。」と泣きだしてしまった。山番は、少年たちが無断ではつたけ山を荒らしたことを、なお、くどくどとおこった。そして、「またはいって来ると、承知しねえぞ。」

そう言つて、ふたりを松林の外に追い立てた。そこまで来ると、じいさんは帽子の中のはつたけを、自分のざるの中に入れて、からになった入れ物を少年にたきつけたなり行つてしまった。

弟はなおしく／＼泣いていたが、こゝんで、芝の上に落ちてゐる兄の帽子を拾つた。そして、それを兄に手渡そうとした。すると兄は、帽子を受け取らずに、いきなり、弟の横つらをなぐりつけた。じいさんになぐられたので、そのとばちちりが弟に飛んで行つたのだろうか。いや、いや。こうした場合、年下の者なんぞから親切にされると、何か知らないが、兄にはいっそうたまらなかつたのである。弟は不意になぐられたので、前よりも激しく泣きだした。と、その声につれて、今まで泣かずいた兄も、弟をなぐつておきながら、また「わあっ。」と泣きだしてしまった。

それから、ふたりは長いこと泣いていた。はじめは、声を立てて泣いていたけれど、しまいには、たゞ機械的に涙が出るだけだった。そして、あつたかい水玉が、ひっきりなしに流れてゐるうちに、ふたりのほつたは、何か柔らかなものになでられてゐるような、なんともいえない快感をおぼえて来た。その時、弟は小さい声で言つた。

「にいさん、かんべんしてね。」

「うん。」

兄はたゞ「うん。」と言つただけだった。声はうるんでゐるが、明かるい響きを持つていた。

やがて兄は、どろだらけになつてゐる帽子を拾つて、ひさの上で五、六度たゝいた。かれはそれをかぶらないで、片手に持ったまゝ、別の手で弟の手を取つた。そして、うちの方へ歩きだした。しかし、ふたりはみち／＼思い出したように、なお、泣きじゃくつていた。

(山本有三全集)

研究

- 一 兄の心の動きがどういふふうに表示されてゐるか。
 - 二 兄らしい落ち着きやいたわり深い氣持などが、会話のどういふことばに表示されているか。
 - 三 兄と弟との会話を、姉と妹、父や母と子供、先生と生徒の場合に変えて、ふだん使う自分
-
- 四 ことばづかいは、どういふ人にならうか。合に話すかによつて、どんなに違ふかを反省してみよう。
 - 五 「捨てっち、まう」「こん中」「入れとき」「持ってく」などは、会話以外の文章に使つてもいいか、みんな話してあつてみよう。

【二】峠の茶屋

夏目漱石

「おい。」と声をかけたが、返事がない。

軒下から奥をのぞくと、すゝけた障子が立て切つてある。向こう側は見えない。五、六足のわらじがさびしそくにひさしからつるされて、くつたくげに、ふらりふらりと揺れる。下に駄菓子ダ菓子の箱が三つばかり並んで、そばに五厘銭が散らばつてゐる。

「おい。」と、また声をかける。土間のすみに片寄せてあるうすの上にふくれていたにわとりが、驚いて目をさます。「く、く、く、く。」と騒ぎだす。敷居の外の上べついが、今しがたの雨にぬれて、半分ほど色が変わつてる上に、まっ黒な茶がまがかけてあるが、土の茶がまか、銀の茶がまかわからない。さいわい下はたきつけてある。

返事がないから、無断で、すつとはいって、床几の上へ腰をおろした。にわとりは羽ばたきをしてうすから飛び降りる。今度は疊の上へ上がった。障子が締めてなければ奥までかけ抜ける気かもしれない。雄が太い声で「こけっこっこ。」という、雌が細い声で「けけっこっこ。」という。まるで余をきつねか犬のように考えているらしい。床几の上には、一升ますほどなたばこ盆が閑靜に控えて、中にはとぐろを巻いた線香が、日の移るの知らぬ顔で、すこぶる悠長にくすぶっている。雨は次第に収まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、す、けた障子がさらりとあく。中からひとりのばあさんが出る。どうせだれか出るだろうと思っていた。へついに火は燃えている。菓子箱の上に銭が散らばっている。線香はのんきにいぶっている。どうせ出るにはきまつている。しかし、自分の店をあけ放しても苦にならないと見えるところが、少し都とは違っている。返事がないのに床几に腰かけて、いつまでも待つてるのも、少し二十世紀とは受け取れない。こゝらが非人情でおもしろい。その上、出て来たばあさんの顔が氣に入った。

二、三年前、宝生の舞台で高砂を見たことがある。その時、これは美しい活人画だと思った。ほうきをかついだじいさんが橋がかりを五、六歩來て、そろりとうしろ向きになって、ばあさんと向かいあう。その向かいあつた姿勢が、今でも目につく。余の席からはばあさんの顔がほとんどま向きに見えたから、あゝ美しいと思つた時に、その表情はびしゃりと心のカメラへ焼きついてしまった。茶店のばあさんの顔はこの写真に血を通わしたほど似ている。

「おばあさん、こゝをちよつと借りたよ。」

「はい、これはいっころ存じませんで。」

「だいぶ降つたね。」

「あいにくなお天氣で、さぞお困りでござんしょ。お、く、だいぶおぬれなされた。今火をたいてかわかしてあげましょ。」

「そこをもう少し燃しつけてくれれば、あたりながらかわかすよ。どうも少し休んだら寒くなった。」

「へえ、たゞいまたいてあげます。まあお茶を一つ。」
と立ち上がりながら、「しっく。」と二声でにわとりを追ひ下げる。「こゝ、こゝ。」とかけたした夫婦は、焦げ茶色の疊から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛び出す。雄の方が、逃げる時駄菓子の上へふんをたれた。

「まあ一つ。」と、ばあさんはいつの間にか、くち抜き盆の上に茶わんを載せて出す。茶の色の黒焦げている底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけられている。

「お菓子を。」と、今度はにわとりの踏みつけたごまねじとみじん棒を持って來る。ふんはどこぞについておらぬかとながめてみたが、それは箱の中に取り残されていた。

ばあさんはそでなしの上からたすきをかけて、へついの前へうすくまる。余はふところから写生

帳を取り出して、ばあさんの横顔を写しながら、話をしかける。

「閑静でいゝね。」

「へえ、ごらんの通りの山里で。」

「うぐいすは鳴くかね。」

「え、毎日のように鳴きます。こゝらは夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちっとも聞えないと、なお聞きたい。」

「あいにく、きょうは——さっきの雨でどこぞへ逃げました。」

おりから、へつついのうちがばち／＼と鳴って、赤い火がさつと風を起して一尺あまり吹き出す。

「さあ、おあたり。さぞお寒かろ。」と言う。軒を見えると青い煙が突き当たってくすねながらに、かすかなあとを、まだ板びさしにからんでいる。

「あゝ、いい心持だ。おかげで生き返った。」

「いゝぐあいに雨も晴れました。そら、天狗岩が見えだしました。」

逡巡として曇りがちな春の空を、もどかしとばかりに吹き拂う山あらしの、思い切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れ盡くして、老嫗の指さす方に巘岨と、あら削りの柱のごとくそびえるのが天狗岩だそうだ。

余はまず天狗岩をながめて、次にばあさんをながめて、三度めには半々に両方を見比べた。画家として余が頭の中に存在するばあさんの顔は、高砂のばゝと、蘆雪のかいた山うばのみである。蘆雪の図を見た時、理想のばあさんはものすごいものだと感じた。もみじの中か、寒い月の下に置くべきもの

と考えた。宝生の別会能を見るに及んで、なるほど老女にもこんなやさしい表情がありうるものかと驚いた。あの面は、さだめて名人の刻んだものだろう。惜しいことに作者の名は聞き落したが、老人もこう表わせば、豊かに、穩やかに、暖かに見える。金屏にも、春風にも、あるは櫻にもあしらってさしつかえない道具である。余は天狗岩よりは、腰を伸ばして、手をかざして、遠く向こうを指さしているそでなし姿のばあさんを、春の山路の景物としてかっこうなものだと考えた。余が写生帳を取り上げて、今しばらくというたん、ばあさんの姿勢はくすれた。

手持ちぶさに写生帳を火にあててかわかしながら、

「おばあさん、じょうぶそうだね。」と尋ねた。

「はい。ありがたいことになつしゃで——針も持ちます、草もうみます、おだんごの粉もひきます。」

このおばあさんに石うすをひかしてみたくなつた。しかし、そんな注文もできぬから、

「こゝから那古井までは一里足らずだつたね。」と別なことを聞いてみる。

「はい、二十八町と申します。だんなは湯治にお越しで……。」

「こみあわなければ少し逗留しようかと思うが、まあ氣が向けばさ。」

「いえ、近ごろは、とんとまいる者はございません。まるで締め切り同様でございます。」

「妙なことだね。それじゃ、泊めてくれないかもしれんね。」

「いえ、お頼みなればいつでも泊めます。」

「宿屋はたった一軒だつたね。」

「へえ、志保田さんとお聞きになればすぐわかります。村の物持で、湯治場だか、隠居所だかわか

りません。」

「じゃ、お客がなくても平氣なわけだね。」

「だんなははじめてで。」

「いや、久しい以前ちよつと行ったことがある。」

会話はちよつととぎれる。帳面をあけて、さっきのにわとりを靜かに写生していると、落ち着いた耳の底へじやらんじやらんという馬の鈴が聞えた。 (漱石全集)

研究

一 画家とばあさんとのことばのやり取りのしかたにはどういふ違いがあるか。

二 にわとりの鳴き声は、雄と雌とで、また、その場の違いによって、どういふふうに書き分けられているか。

三 会話の部分と地の文とで、ことばの上にとどういふ違いがあるか。

四 「二十世紀」とは、どういふことか。たとえとして用いられているか。前の部分をよく読んで考えてみよう。

五 「別会能」とはどういふ意味か、「月並の能」と比較して考えてみよう。

六 地の文の中にある、次のような作者独自の表現についてよく研究し、まねてよいかどうか考えてみよう。

うすの上にふくれていたにわとり。
たばこ盆が閑靜に控える。

とぐろを巻いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、すこぶる悠長にくすぶっている。
その表情はびしゃりと心のカメラへ焼き

ついでにしまった。

前山の一角は、未練もなく晴れ盡くす。

老人もこう表わせば、豊かに、穏やかに、暖かに見える。

七 作者は、「ている」「ない」の意味で、「て

る」「ぬ」を用いているが、こういう言い方を
してよいか考えてみよう。

八 ユーモアやこっけいを含んだ言い方を調べてみよう。

〔三〕 現代語の語感

佐久間 鼎

「はなさかじ、い」のおとぎばなしで、殿様がおっしゃったことばとして、「花を咲かせてごらん。」と言うと、その「ごらん」が、一種異様に感じられるという話を耳にしました。ふだん、こういうことばを用い慣れていない地方の人たち、目からばかりかういふ辞句を習った人たちには、「ごらん」ということばは、よほどていちょうなものに思われましょう。以前の本にはよく、「花を咲かせてみよ。」とありました。その方がよいのではないか……そう感じる人たちも、少なくとも思われます。ところが、「みよ」という形は、現在の口語では、若干の地方のほかには、おそろくほとんど使われないと思われるほど、古いものです。もちろん、文語で用いられるまゝの「みよ」の形を、口語の中に取り入れて使っている方言も少しはあるようですが、これは実は口語としてはしっくりしない、特殊の変態的なものです。

「みる」の活用において、命令の形は、関東系の語法では「みろ」となりますし、関西系では「み

い」というふうになる方が多いでしょう。博多方言などでは、それが「みれ」となるのは、この動詞が四段活用に近づいたからで、それに應じて否定の場合は「みらん」となる次第です。「おきろ」「みる」などのような命令の形が実際用いられる場合は、相手を見くだして、「ぞんざい」なもの言いをするという感じがあります。たとい自分より身分の低い者、目下の者に対しても、あまり露骨過ぎることばつきだという氣がします。

同様な事由から、一般に語法上の命令形が実際に使われる場合は、よほど局限されて來ます。たとえば、動物たるはとに対しては、「おりてこい。」という命令の形が使われますが、子供に対しては、「こい」と言わずに「おいで」と使われます。

同様な関係を「みろ」という命令形と「ごらん」という言い方との間に認めることができましょう。「咲かせてみよ。」では実感がありませんし、「……みろ」では殿様のことばとしてはきたな過ぎる(封建的過ぎもする)という感じがしますので、むしろ「ごらん」とした方がいいものと推察されます。

また命令形「來い」「進め」「勝て」「走れ」「出せ」「急げ」「帰れ」「降れ」「積もれ」などが実際に使われる場合には、何人に向かって、どういう場合に発せられるかを注意してごらん下さい。他人に對してもの言う場合に使われるのは、全然例がないというべきほです。たゞ、声援の場合のように簡潔を主眼とするために、命令形を使用することは、理由のあることといふべきです。電報の文句のごときも、同様の次第で、命令形がしばしば用いられます。端的に意志を伝える必要が、その語形を要求するためです。

それからまた「今に見ていろ。」などの語句も、しかるべきところには使われることがあります。

そういうわけで、この種の命令形を特に忌避すべき理由はありません。むしろこういう形の存在することを積極的に示す必要もあると思います。しかし、これを用いるべき場合というものを十分顧慮することが必要です。他人に對して言う場合に、命令の形でのもの言いはあまり使われません。これは擬人的に取り扱われた動物や品物に對しての場合だけに限られています。

社会生活における用語のニュアンスは、日本語には特に相手のいかに應じて、尊卑の種々の段階にそれ／＼あてはまることばの使い分けに著しいものがあります。すなわち、相手を敬つて言う場合と、普通に言う場合と、卑しめて言う場合と、少なくともそういった区別ができます。その一方にまた、種の度合の親しみを表わす言い方が、幾通りかあります。これが交錯して、一方からいえばかなり煩雑なことばの使い分けが行われています。

地方在住の人たちにとって、かなり敬意を表わす言い方と受け取られる「ごらん」とか、「おいで」とかいうことばづかいは、今日それが日常語として用いられている社会では、さほどの敬意も含まない、むしろ親しみをもって普通に命令の心持を伝えることばつきとなっています。で、地方人士の感じとしては、召使などが主人の子供に對して、「してごらん。」とか、「こっちへおいで。」とか言うのは、かくべつたかびしゃに命令的に言う態度を表白するものではないのでしょうか。ところが、東京のことばとしてこういうことを言ったら、その召使は、「なんてことばが悪いんでしょう。」と、子供の母親からこぶとをくうにきまっています。子供自身も、そう言われては、「なんだい、いやにえはってやがら。」といったようなわけで、言うことを聞きますまい。こゝでは、「ごらん下さい」「いらっしゃい」とあるべきです。こうした実際の事情が、たゞ紙上でことばの講釈を聞いているだけの人たちには、

なか／＼のみこめないようです。しかも、そういうことばの生活的な感じ、いわば語感がなくて、多くは概念的に取り扱われているようなのが、現在のありさまです。

日本語における敬讓のことはづかいが煩雜過ぎるという声には、まことにもつともなところがあると思います。心にもなく、口先だけでいいいなことを言うようなのは、むしろ大いに整理する方に賛成します。で、一方では敬語法の整理あるいは節約ということを提唱したいと考えています。しかし、心持のありのまま、を言い表わすという意味で、敬意を失わない程度のことばづかいをすることは、社会生活においてかなりたいせつな心得なのです。

(現代日本語の表現と語法)

研究

- 一 敬語は、どういう意味で必要か。
- 二 命令の形でのもの言い方は、擬人的に扱われた動物や品物に対しての場合だけに限られているとはどういうことか。おりにこい、はと。などの言い方を例として考えてみよう。
- 三 社会生活における用語のニュアンスの著しいのはどんな場合か。
- 四 語感、ことばを使う上にどうしてたいせつか。
- 五 尊卑の種々の段階を表わす他の言い方を考えてみよう。
- 六 親しみの種々の度合を表わす言い方について例をあげてみよう。
- 七 地方地方によってことばの違うことを調べてみよう。
- 八 言いたいことを、自由に話すようにする一方、細かいことばづかいにも注意するよう反省しあおう。

三 感想のまとめ方

会話・講演・講義・朗読・演劇・映画、こういうふうにならべて行くと、われ／＼は、人と話しあったり、人の話を聞いたたりする機会が非常に多い。その時、人の話がわからないようでは、力を合わせてりつばな社会を作りあげて行く民主主義社会の一員としての資格に欠けることとなる。人の話がよくわかるためには、ふだんからいろいろの能力を身につけておかなければならない。よく働く頭、よく注意を集中できる能力、何事でも一通りは知っている程度の知識、重要なものとそれほど重要でないものと区別する力、話し手のことばがよくわかるような國語の力。こういう教養や能力を養い、これをその場に当たって活用して、話し手が何を言おうとしているか、話し手が言おうとしている問題のおもなものはどういうものかを見きわめなければならぬ。講演などでは、話し手が何を言おうとしているかは、標題からもわかる。話のおもな点は、慣れた話し手であれば、話の冒頭に簡條書きにして示し、話の進みに應じて、それに関連して話し、最後に概括するに違いないので、それをはずきりつかめばよい。われ／＼は、自分でも論題の中心を整理し、それをノートにし、わからないことがあれば話し手に確かめ、あとでそれを感想文にまとめてみよう。こういう作業をくり返すことによって、われ／＼は聞きじょうずとなるのである。なお、聞き手としては、話し手が思うことを愉快に十分述べるができるような、りっ

ばな態度をしていなければならない。そういう態度について話しあって反省してみよう。民主主義社会の一員として、われ／＼は、いろんな人に接し、いろんな物事を経験して見聞を廣める必要がある。それには、ラジオ・映画なども大いに役立つが、読書は最も役に立つ。書物は、その範囲が古今東西にわたっているので、これをよく読んでわかるようにすればよいのである。書物を読んでそれがよくわかるためには、人の話を聞く時と同じような教養や能力を身につけておかなければならない。たゞ読書の時は、相手がじっとしていて、なんべんでも読みなおし考えなおすことができる。それで、熟読して意味をまじがいなく取るとか、辞書によって、わからない語句や不確かな語句の意味を知ったり確かめたりするとかができる。したがって、そういう能力をも身につけ、これを活用して、著者の言おうとしていること、中心をなしている思想をつかんで、これをまとめあげるようにしなければならない。こういう努力を積み重ねて行けば、一々辞書などを引かなくても意味がわかるようになる。こういう研究的な読書をしておけば、娯樂のための読書もらくに楽しくできるようになる。時には、声を出して読んだり、友だちや家の人たちに読んで聞かせたり、また、他の人に筋書を話したりしてみよう。そういうことによって、読書の能力は高まって行くのである。なお読書の態度について研究しあってみよう。

次の文章は、講話やお話を文字にしたものと考えて載せたものである。よく読んで、読む力を養うだけでなく、話を聞く力をつける材料としても役立てよう。

〔一〕 水害の話

中谷 宇吉郎

昨年の夏から秋にかけて、日本の國は、水害のためにひどいめにあった。夏のはじめに、東北地方に大洪水があつて、東北本線も奥羽線も、両方とも、五日間も不通になつた。鉄道のおもな線路が二本も不通になつたまゝ、五日間もいたというのは、こゝ何十年の間に、めつたにないことである。橋が流され、堤防がいたるところで切れて、田も畑もたくさん流されてしまつた。こういうひどい水害は、何十年ぶりのことだなどと言って、みんながいっしょうけんめいになつて、そのあとしまつをした。ところが、八月の中ごろに、また洪水があつた。そして、せつかく新しくかけた仮橋を流し、土俵を積んでなおした堤防がまた切れて、ひどい損害を受けた。この時には、北海道にも洪水があつて、石狩川がはらんして、たいへんな損害があつた。

これでもうおしまいかと思つたら、九月にはいつてカサリン台風による大洪水が、日本の國の半分以上にはらんを起した。利根川の大水害が、東京に近かつたせいで、損害も大きく、人々の注意をすつかり奪つてしまつたが、あの時は東北地方にも北海道にも洪水があつて、ひどいめにあつたのである。東北の一の関という駅の近くを汽車で通つたら、電線の上にはわらくすが引つかうつていて、ここまで水がついたことがわかつてびびくりした。北海道でも、ほとんど全部の川がはらんを起して、十七箇所も汽車の不通になつた所ができたほどである。利根川だけの問題ではなかつたのである。

一年に一回くらいのことならば、特に雨が多かつたのだとあきらめることもできる。そういう天災は、十年か五年に一度は来るものでしかたがない。しかし、こうたび／＼洪水が起るのは、たゞの天

災だけではないと考えねばならない。もともと、カサリン台風の時は、山地の方で六百ミリなどという、今までの記録に珍しい、ひどい雨が降ったということである。それで、これは天災の一つで、来年もまたこんな雨が降ることはないかもしれない。しかし、七月・八月の洪水は、特別の地方を除いては、それほど今までに例の少ないひどい雨というほどではなかった。それで、洪水が起ったのは、水源地や川の手入れが悪かったのがおもな原因であつたと思われる。

それは、政府の方でも認めていることらしく、農林大臣が、今度の水害は、戦時中に山の本をむやみに切つたためであるという意見を言われ、それが新聞にも出ていた。そうすると、これはたいへんな問題である。これから木を植えても急に大きくなるわけではないから、少なくともこれから十年くらいは、毎年ひどい水害があることになるであろう。ことしの洪水による損害は、流された橋をかけたたり、堤防をなおしたり、道路をなおしたりする費用だけでも、二百億円以上かかるらしい。なおしただけでは、來年の洪水は防げないから、更に、川をなおしたり、堤防を強くしたりする必要がある。その費用は少なくとも復旧費の十倍はかかるだろうから、二千五百億円くらいにはなるだろう。そんな費用を、敗戦後の日本の國から、出せるわけではない。しかし、ほうっておけば來年もまた水害で、そんなことを毎年くり返していたら、國がつぶれてしまふだろう。

水害の問題は、こういうふうに考えて來ると、非常にたいせつな國家の問題である。しかも、ちよつと手のつけようのないむずかしい問題なのである。こういう問題を片づけるには、科学の力を借りるよりほかに道はない。考えてみれば、雨が降り、水が川に集まり、下流に行くにしたがつて水かさが増し、水の力がある程度以上強くなると堤防をこわす。その筋道はどれもみな科学の問題である。だ

から、科学の力によって解決するのが一番いい方法で、ほかには解決の道がないはずである。

ところが、不思議なことには、洪水についての科学的研究は、日本の國には非常に少ないのである。明治時代から今日まで、毎年多かれ少なかれ水害に苦しみながら、それに対する研究はほとんどないと言つていくらい少ない。もちろん河川学という学問があり、その方面の学者はいろいろの研究をしておられるし、内務省の河川方面の技師たちは、いろいろ調査をしておられる。しかし、それらの研究や調査は、工学的のものが多く、洪水そのものの科学的研究は少ないのである。もともと、目的が違ふので、洪水についてはそれを防ぐ實際のくふうをするのが任務であるから、当然なことなのである。

そこで、洪水そのもののいろいろな性質が、いかにわかっていないかという例を一つあげよう。先ほど言つた農林大臣のお話が、すでにその例である。今度の洪水は戦時中や戦後に、山の本をむやみに切つたことが原因だということは、農林大臣の話をつつまでもなく、だれでも考えることである。しかし、それがほんとうに洪水の原因であるかどうかときいてみると、科学的にははっきりしない話なのである。少なくとも、どれくらいに木を切ると、どれくらい洪水が出やすくなるかという数量的なことは、全くわかっていない。数量的に説明できなければ、科学でもなく、また實際に対策を立てる場合の役にも立たない。

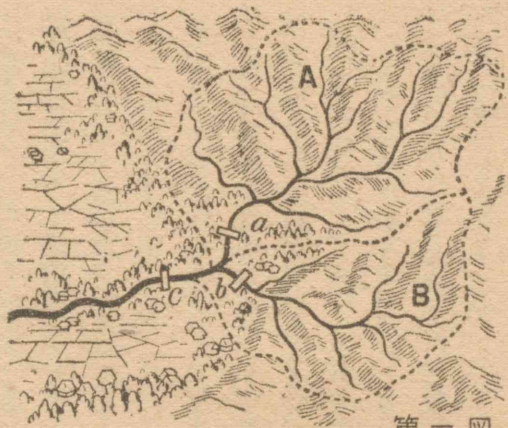
伐木と洪水との関係を調べるだけでも、実は、たいへんな仕事なのである。昨年八月の石狩川上流のはらんについて、その研究をしてみたのであるが、はっきりしたことはわからなかった。調べたのは、石狩川支流の忠別川ちおべつの上流地方についてである。上流で八メートル以上も水かさが増して、そ

れに、山くすれでせきとめられた水があれば、松山温泉の大きい建物が一瞬にして押し流されてしまったという、恐ろしい洪水であった。

水が引いてやっと歩けるようになってから、大学の若い学者がふたりで調査に行った。上流地方で

山の斜面に降った雨が、沢に流れこんで溪流となり、それが集まって小川になり、そういう小川が集まって川になる。この場合、一つの川に集まる水がどこから来るかは、地図の上で高低を見ればわかる。ある川に水を供給する区域を集水区域という。第一図でAなる集水区域に降った雨は、a点に流れて来るし、Bなる集水区域に降った雨は、b点に集まって来る。それで今a点で、洪水のさいちゅううにどれだけの水が出たか調べてみる。次にb点でも同じように調べてみる。

洪水というのは、一度に水がたくさん出ることである。もし、Aなる地域にどんなにたくさん雨が降ったとしても、この地域内の木や草が海綿のような役目をするか、あるいは斜面を流れくだるのに時間がかかるとして、ゆっくり水が集まって来れば、洪水にはならない。雨が地面にしみこんで地下水となってまた出て来るのならば、なお心配がないわけである。それで、a点で、洪水のさいちゅううに、一秒間にどれだけの水が流れたかが問題である。それを最大出水量ということにして、それを測ってみる。もっとも、AとBとを比べる場合、面積が違うので、広い方からたくさん

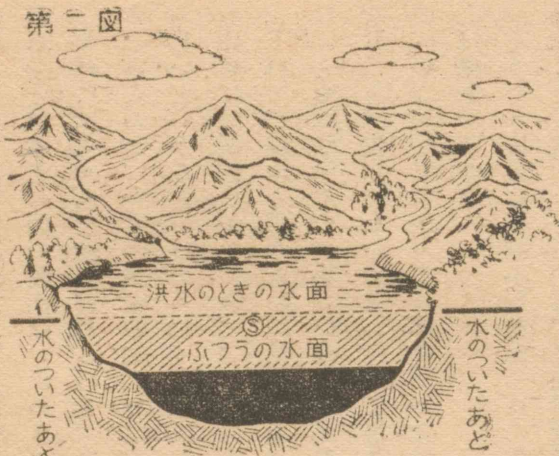


第一図

んの水が出るのは当然である。それで、最大出水量を集水区域の面積で割った数字が必要である。すなわち、一平方キロの面積からどれだけの水が出たかを計算して、それを比べてみなければならぬ。それだけではまだ不十分で、もしAの地域の傾斜が急ならば、その方からよけいに急に水が出るはずである。それで、集水区域の平均の傾斜を地図の上で調べて、それも勘定に入れなければならない。

A地域とB地域とについて、そういう計算をして、どっちからたくさん水が出たかを調べてみる。この場合、a点なりb点なりで、洪水のさいちゅううにどれだけの出水量があったかは、水かさが一番ふえた時に、川の水面がどこまで上がったかを調べれば、計算で出せる。洪水のあと半月ぐらいのうちに、水面がどこまで上がったかはわかる。

第二図に斜線で示した面積S、すなわち川の面積を測ってみる。別に、この地点での川の流れの平均の傾斜を測る。また川底の様子を調べたりして、一秒間にどれだけの水が流れたか、だいたい計算で出せるのである。そういう測定を、第一図のa点とb点とで、別々にやる。それからの点でも同じ測定をする。そしてa点の出水量とb点の出水量とを加えてみて、それがc点での出水量とだいたい一致すれば、測定も計算もまちがっていないと考えることができる。



第二図

忠別川の場合は、九つの集水区域に分けることができたので、それについて出水量を出してみた。そして、それらを各集水区域の面積で割った数を出して比べてみた。ある区域は木をほとんど全部切っており、ほかの区域ではそれほどなく、またほとんど木を切っていない地域もあった。しかし、出水量と伐木との間の関係は、はっきりとはわからなかった。

それにはちゃんと理由があるので、今までの説明は、雨がどこも一様に降ったと仮定しての話である。ところが、今度の調査の結果では、こういう洪水を起すような強い雨は、ひどくむらに降るものらしいということがわかった。A地域とB地域とでは、雨量がかなり違うらしいのであるが、こういう山奥には観測所がないので、これ以上は調べようがないのである。

それで、伐木と洪水との関係を、ちゃんと科学的に調べようと思ったら、水源地一帯の山奥に、少なくとも五つや六つの小さい観測小屋を作る必要がある。そして雨量の詳しい観測をしなければ、確かなことは決してわからないはずである。ところが、そういう雨量観測所は、日本では今までに作られていない。したがって、木を切ったために洪水が起ったかどうかは、科学的に研究されていないことは確かである。

そういう山奥に観測小屋をたくさん作って、研究者を住まわせて観測をさせることは、もちろん容易なことではない。しかし、自記雨量計という器械があるから、人間がついていなくても、雨量の観測はできる。それで、やる気さえあれば、一度の洪水で受ける損害の一万分の一にも足らぬ研究費を出せば、これくらいのはことは、もうとつづくにわかっているはずである。しかし、何十年という間、毎年水害に苦しみながら、それくらい科学的に研究さえもしなかったというのが、今日までの日本であ

ったのである。

今に諸君がおとなになったら、いつまでも日本をこういう状態にしておかないように、科学をよく勉強してください。こういうばかなことが、いつまでも続いているのは、今のおとなの人たちの大部分が、科学というものを全然知らないからだろうと思えます。

(雑誌「少年」)

研究

- 一 普通に天災といわれるものは、ほんとうの意味の天災で、人力によって未然に防ぐことのできないものだけであろうか。
- 二 普通に水害の原因といわれるものは、ほんとうの意味の原因だけであろうか。
- 三 水害は、國にどんな関係があるか。
- 四 洪水の工学的な研究調査とはどういうことか。
- 五 水害の科学的研究とはどういうことか。
- 六 「数量的に説明できなければ、科学でもない。」とは、どういうことか。
- 七 これからの日本と科学との関係はどうか。
- 八 この話を簡単にまとめて、感想を書いてみよう。
- 九 こういう話を講演として聞く時には、どういふ予備知識や心がけが必要であるか。たとえば、わかりにくいことばの音や意味をつかむのには、どういう注意が必要であるか。

〔二〕 月光の曲

片山 敏彦

ベートーヴェンは二十五歳のころに、音楽の勉強も一通り身につけて、作曲家としての自分の作品

を発表しはじめました。作品第一は、三つの弦楽三重奏曲（トリオ）でした。

そのころ、故郷のボンの方にもいろ／＼と政治の上の変化などがあって事情が変わって来て、選帝侯家から学資金として送られるはずの金も来ないことになったので、ベートーヴェンは全く自力で生活することになりました。その上かれは、ボンで父のなくなったあと、ふたりの弟をウィーンへ呼び寄せてめんどろを見てやることにしました。そして上の弟を役人にし、下の弟を薬劑士にして、それぞれ職につかせることができました。ベートーヴェンが作曲家として生活上の独立を得ることができたのも、親切な友人たちに負うところが少なくなかったのです。故郷ボンですでにベートーヴェンにいろ／＼親切を示したヴァルトスタイン伯爵が、ウィーンの音楽好きな貴族たちにベートーヴェンを紹介したことも、大いにきゝめのあることでした。ロブコウイツ公とか、リヒノフスキー公とか、テズモフスキー伯とか、エスターハーツィー公とかいう名まえは、今ではベートーヴェンの一生とその作品とを知る人々にとって親しいものになっています。しかし、ベートーヴェンが自分の音楽によってようやく生活上の独立をして、これから大いに仕事ができるという希望を持ちかけたところに、悲しむべき不幸が始まったのです。三十歳にもまだならない若いベートーヴェンは、耳が聞えなくなりはじめたのです。想像してもごらん下さい。音楽家であって、これからほんとうにりっぱな仕事ができるぞという自信が持てるようになったとたんに耳が聞えなくなるということが、どんなに悲しくつらいことか。かれは絶え間なく耳鳴りに苦しめられるようになり、聴力は次第に弱って来ました。かれはこのことを、はじめの間は親友にも話さずに秘密にしていました。また自分のつんばを人に氣づかれないために、自然人々を避けて、自分ひとりであるようになりました。一八〇一年三十一歳の

時、とう／＼ベートーヴェンは、一番親しい友の、医師ヴェーゲラーと牧師アメンダとに自分の悩みをうち明けたのでした。

ベートーヴェン



ポンのヴェーゲラーへの手紙には――

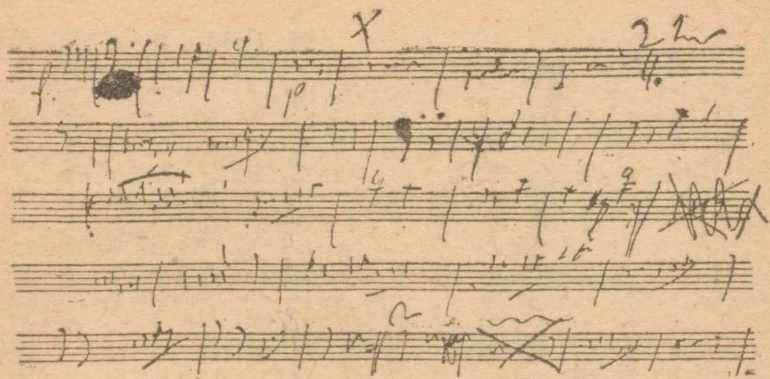
「親しい善良な親切なアメンダ。今きみがぼくのそばにいてくれたら、どんなにぼくはうれしいことだろうに。きみの友ベートーヴェンは、今ほんとに不幸になっているのだ。ぼくにとっては何よりたいせつな聴力が弱って来たのだ。近ごろ病状がだん／＼悪くなり、ぼくはもうなおらないのではあるまいかと心配している。こんな病氣はたいそうなおりにくい。ぼくはなんと悲しい生活をしなければならぬことか。自分に親しい人や物を、ぼくはわざ／＼避けるようにして生きなければならぬ。悲しいあきらめ、――それをぼくは自分の隠れ家にしなければならぬのだ。」

「――二年前から、ぼくは人々の中へ出ることを避けている。ぼくはつんばなのだと人々に告げることは、ぼくにはやりきれないことだ。ぼくは、劇場で俳優の言うことを聞くためには、オーケストラにくっついていて一番前の席にいけない。少し舞台から遠い席にいと、もう、楽器も、調子の高い歌声も、よく聞えない。低い声で話す人の声も、時々、ほとんど聞えないことがある。しかもだれかが急に叫び声を立てると、それがまたぼくの耳には非常につらい。ブルターク

が書いた本を読んで、ぼくは、あきらめるといふことの尊いことを知った。あきらめ。これはなんという悲しい避難所だろう。しかもこれが、今ではぼくにとつての唯一の避難所なのだ。」

ところが不思議なことがあります。こんなに気の毒な、つらい氣持の時に作ったベートーヴェンの音楽作品の中には、たいへん朗らかな、明かるい、楽しいものがあるのです。たとえば、今のヴェーグラーあての手紙の前年、一八〇〇年、すなわちかれが三十歳の時につくりあげた「第一交響曲」にも、少年のころの楽しい思ひ出の氣持がすく／＼しく描かれているし、「第二交響曲」もまた、若々しく朗らかな曲です。苦しい時でも、いっしょうけんめいで、夢中に、純粹な氣持を集中して仕事をすると、その仕事の結果には、自分でも氣のつかなくなったような楽しく明かるいものが、自然に現われていて、それがまた他人の心をも楽しくし、幸福にすることがある。これはまことにおもしろい事実ではありませんか。とりわけ、音楽とか藝術とかの仕事の場合に、そんなことがあります。有名な「月光の曲」と呼ばれるピアノソナタを書いたのは、ベートーヴェンが三十二歳の時です。あれは作品二十七番の第二です。そのころかれはウィーン郊外のハイリゲンスタットという所に住んでいました。ある晩、ベートーヴェンがその部落を散歩していると、一軒の小さな家の窓からピアノの音が聞えて來ました。それはかれが作曲した二長調のソナタでした。すると、そのあとでこんなことばも聞えて來ました。

月光の曲



三 感想のまとめ方

に樂譜がないので、どうしたのかと不審に思つて、今ひいていた少女の方を見つめました。すると、その少女はめくらなのでした。彼女は、だれだか知らない人が急にはいつて來たのでびっくりしましたが、どうしてその曲をおぼえたのかというベートーヴェンの間に、おす／＼と答えました。「この曲を人がひくの聞いて、暗記したのです。」と。その時、月の光が青白く窓からへやの中にさして、目の見えない悲しそうな少女の顔が、その光の中に浮かび上がっていました。妹の様子を見て、兄は思わず、「かわいそうな妹。」と、低い声で言いました。

ベートーヴェンはピアノの前に腰をかけて言いました。

「妹さんのために、わたしが月光の曲をひきましょう。」

かれは即興の曲をひきましたが、それがのちに「月光の曲」と呼ばれる、あのピアノソナタの、第一樂章となりました。あのソナタを「月光の曲」とはじめて名づけたのは、レルスタープという人です。

こんなふうに、ベートーヴェンは、人に対する愛情の深い心を持つていたけれど、耳の病氣が次第に進み、しかも自分が音楽家であるために、自分の耳の聞えないことをなるべく人々に隠そうとして

人々とのつきあいに無理が起つて来たため、だん／＼と自分の生活の中へ閉じこもりがちになって、
氣持が暗くなつて来ました。また人々は、ベートーヴェンをかたくなな、冷たい心の人間だと誤解す
ることも時々あるのです。そんなわけで、一時はほんとうに絶望してしまつて、死んでしまおうと
さえ考えたらしいのです。一八〇二年に書いた「ハイリゲンスタットの遺書」という文章が残つてい
ます。自分が死んだあとで自分の意志の通りに取りはからつてくれるようにと、ふたりの弟、カール
とヨハンにあてて書いた手紙ですが、この文章を読んで私たちが感じる心持は、ベートーヴェンの音
樂を聞いて私たちが感じる心持とよく似ています。

「私を、かたくなな人間らしい人間だと思ひこんで、他人にもそんなふうには言ひふらす人々よ、
きみたちは私という人間について全く思い違いをしている。私の心は幼い時から、いつでも善意
のやさしい感情の方へ傾いていて、りっぱな行いをすることを自分の義務だと考えている。神よ、
あなたは私の心の奥を御存じです。他日これを讀む人々の中で、私と同じように不幸な人は、この中
から自分のための慰めを見つけるがよい。自分と同じひとり不幸な人間（すなわちベートーヴェ
ン）が、いろ／＼とつらい障害に出会つたにもかゝらず、それでもほんとうにりっぱな藝術家に
なることを志して、全力を盡くして生きたということを知つて、励まされ、慰められるがよい。」
夏じゅうはハイリゲンスタットで耳の養生をして、もしや少しはよくなるだろうかという一筋の望
みにすがりついていたのだが、ついに回復の希望は見えず、いつの間にか、緑と金とに輝く夏も過ぎ、
かれが好んで散歩した並木道（今では「ベートーヴェンの並木道」という名がついている。）の木々の
葉もいつしか秋風に色づいて、こつこつと散りはじめる、野ぶどうの葉は紅葉して、乱れた秋草に、

秋の霧が銀色のしずくをこぼす。

「たいせつな私の希望よ。それではおまえにさようならと私は言う。悲しい心でそれを言うのだ。
秋の木の葉の地に散つて朽ちたように、私の望みは枯れた。美しい夏の日々に私を励ました勇氣も
消えた。神よ、喜びに澄みきつたたった一日だけでも、私にください。ほんとうの喜びの反響を、
もう久しい間、私の心は聞くことができません。お、いつ私は再びその反響を、自然と人
間との寺院の中で聞くことができるのですか。もう決してそれを聞くことが、私には許されないと
いうのですか。それはあまりにひど過ぎます。」

ベートーヴェンは、十月十日に、ハイリゲンスタットから再びウィーンへ帰る時、こんなことばを
書きました。

「自然と人間との寺院の中に響く、純粹な喜びの反響。」それを「運命」の手から奪いとられたベ
ートーヴェンは、やがて強い決心と努力とをもって、かれの音樂の中で、自分から産み出すのです。
かれは絶望の底から、今一度勇氣を出して立ち上がります。りっぱな音樂を作るために立ち上がる
のです。前にあげた「第二交響曲」は、ハイリゲンスタットの遺書を書いた翌年に作つた作品ですが、
この曲では、再び勇氣を取りもどした快活さが、なつかしい故郷ボンのライン川のほとりの思い出に
結びついて現われています。

(雑誌「少年文庫」)

研究

一 ベートーヴェンの手紙には、たとえがいか

一

にじょうずに用いられているか、調べてみよ

三 感想のまとめ方

う。

二「あきらめ。これはなんと悲しい避難所
だろう。」という意味について考えてみよう。

三「自然と人間との寺院の中に響く、純粹な喜
びの反響。」とはどういう意味か。「寺院」は、
どうしてこういうたとえに用いられたのであ
ろう。

四 なぜ「月光の曲」という題をつけたのであ
ろう。

五 ベートーヴェンがいろ／＼苦しみに会いな

がらりっぱな藝術家になり、明かるい音楽を
つくり出したことについて、感想をまとめて
みよう。

六 手紙の書きはじめと終りとは、どのような
ことを書くか。社交上の手紙と実務上の手紙
とで違いがあるか。

七 われ／＼が友人にあてて書く手紙と、この
文章の中のような手紙との書き方の違いを研
究してみよう。

〔三〕 一ふさのぶどう

有島武郎

ぼくは小さい時に、絵をかくことが好きでした。ぼくの通っていた学校は横浜の山手^{ヤマテ}という所にあ
りましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、ぼくの学校も、教師は西洋人ばかりでした。
そして、その学校の行き帰りには、いつでも、ホテルや西洋人の会社などが並んでいる海岸の通りを通
るのでした。通りの海沿いに立って見ると、まっさおな海の上にはいろ／＼の商船がいっぱい並んでい
て、煙突から煙の出ているのや、帆柱から帆柱へ万國旗をかけたしたのやがあつて、目が痛いよう
にきれいでした。ぼくはよく岸に立って、その景色を見わたして、家に帰ると、おぼえていただけのをで

きるだけ美しく絵にかいてみようと思いました。けれども、あの透き通るような海のあい色と、白い帆
前船などの水きわ近くに塗つてある洋紅色とは、ぼくの持つている絵の具では、どうしてもうまく出
せませんでした。いくらかいてもかいても、ほんとうの景色で見ると、どうしてか、色はかきまかせでし
た。

ふと、ぼくは学校の友だちの持つている西洋絵の具を思い出しました。その友だちは、やはり西洋
人で、しかもぼくより二つぐらい年が上でしたから、せいは見上げるように大きい子でした。ジムと
いうその子の持つている絵の具は、舶來の上等のもので、軽い木の箱の中に、十二種の絵の具が、小
さな墨のように四角な形に固められて、二列に並んでいました。どの色も美しかったが、とりわけて、
あいと洋紅とはびっくりするほど美しいものでした。ジムはぼくよりせいが高いくせに、絵はすつと
へたでした。それでもその絵の具を塗ると、へたな絵さえなんだか見違えるように美しくなるのです。
ぼくはいつでもそれをうらやましいと思つていました。あんな絵の具さえあれば、ぼくだって、海の
景色を、ほんとうに海に見えるようにかいて見せるのになあと、自分の悪い絵の具を恨みながら考え
ました。そうしたら、その日からジムの絵の具がほしくつてほしくつてたまらなくなりましたけれど、
ぼくはなんだかおくびょうになつて、ババにもママにも買つてくださいと願う氣になれないので、毎
日毎日、その絵の具のことを心の中で思い続けるばかりで幾日か日がたちました。

今ではいつのころだったか覚えてはいませんが、秋だったのでしよう、ぶどうの実が熟していたの
ですから。天氣は、冬が来る前の秋によくあるように、空の奥の奥まで見すかされそうに晴れわたつた
日でした。ぼくたちは先生といっしょに弁当を食べましたが、その樂しみな弁当のさいちゅうでも、
ぼくの心はなんだか落ち着かないで、その日の空とはうらはらに暗かつたのです。ぼくは自分ひとり

で考えこんでいました。だれかが気がついて見たら、顔はきつと青かったかもしれません。ぼくはジムの絵の具がほしくってほしくってたまらなくなりました。胸が痛むほどほしくなりました。ジムはぼくの胸の中で考えていることを知っているに違いないと思って、そっとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、おもしろそうに笑ったりして、わきにすわっている生徒と話をしているのです。でも、その笑っているのがぼくのことを知っていて笑っているようにも思えるし、何か話をしているのが、「いまに見ろ、あの子がぼくの絵の具を取るに違いないから。」と言っているようにも思えるのです。ぼくはいやな氣持になりました。けれども、ジムがぼくを疑っているように見れば見えるほど、ぼくはその絵の具がほしくてならなくなるのです。

ぼくはかわいい顔はしていたかもしれないが、からだも弱い子でした。その上おくびよう者で、言いたいことも言わずに済ますようなたちでした。だから、あんまり人からはかわいがられなかったし、友だちもない方でした。書御飯が済むと、他の子供たちはかっぱつに運動場に出て走りまわって遊びはじめましたが、ぼくだけはなおさらその日は変に心が沈んで、ひとりだけ教場にはいつていました。外が明かるいだけに教場の中は暗くなって、ぼくの心の中のようにでした。自分の席にすわっているながら、ぼくの目は時々ジムの机の方に走りまわりました。ナイフでいろ／＼書いたすらすら書きが彫りつけてあって、手あかでも黒になっているあのふたを揚げると、その中に本や雑記帳や石板といっしょになって、あめのような木の色の絵の具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さな墨のような形をした、あいや洋紅の絵の具が……。ぼくは顔が赤くなったような氣がして、思わずそっぽを向いてしまうのです。けれどもすぐまた横目でジムの机の方を見ないではいられませんでした。胸の所がど

きどきとして苦しいほどでした。じっとすわっていながら、夢で鬼にでも追いかけられた時のように、氣ばかりせか／＼していました。

教場にはいる鐘がかん／＼と鳴りました。ぼくは思わずぎょっとして立ち上がりまわりました。生徒たちが大きな声で笑ったりどなったりしながら、洗面所の方に手を洗いにいかけて行くのが窓から見えました。ぼくは急に頭の中が氷のように冷たくなるのを氣味悪く思いながら、ふら／＼とジムの机の所に行つて、半分夢のようにそのふたを揚げてみました。そこにはぼくが考えていた通り、雑記帳や鉛筆箱とまじって、見覚えのある絵の具箱がしまっていました。なんのためだか知らないが、ぼくはあっちこちをむやみに見まわしてから、手早くその箱のふたをあけて、あいと洋紅との二色を取り上げるが早いのか、ポケットの中に押しこみました。そして急いで、いつも整列して先生を待っている所に走って行きました。

ぼくたちは若い女の先生に連れられて教場にはいり、めい／＼の席にすわりました。ぼくはジムがどんな顔をしているか見たくってたまらなかつたけれども、どうしてもそちの方を振り向くことができませんでした。でも、ぼくのしたことをだれも氣のついた様子がないので、氣味が悪いような安心したような心持でいました。ぼくの大好きな若い女の先生のおっしゃることなんかは、耳にはいいはしても、なんのことだかちっともわかりませんでした。先生も時々不思議そうにぼくの方を見ているようでした。

ぼくはしかし、先生の目を見るのがその日に限ってなんだかいやでした。そんなふうで一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思ひながら一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴ったので、ぼくはほっと安心して、ため息をつきました。けれども、先生が行ってしまおうと、ぼくはぼくの級で一番大きな、そしてよくできる生徒に、

「ちょっとこっちへおいで。」

と、ひじの所をつかまれていました。ぼくの胸は、宿題をなまけたのに先生に名をさされた時のように、思わずどきんとふるえはじめました。けれどもぼくはできるだけ知らないふりをしていなければならぬと思つて、わざと平氣な顔をしたつもりで、しかたなしに運動場のすみに連れて行かれました。

「きみはジムの絵の具を持ってきているだろう。こゝへ出したまえ。」

そう言つて、その生徒はぼくの前に大きく廣げた手をつき出しました。そう言われると、ぼくはかえつて心が落ち着いて、

「そんな物、ぼく、持つてやしない。」

と、つい、でたらめを言つてしまいました。そうすると三、四人の友だちといっしょにぼくのそばに来ていたジムが、

「ぼくは晝休みの前にちゃんと絵の具箱を調べておいたんだよ。一つもなくなつてはいなかつたんだよ。そして晝休みが済んだら、二つなくなつていたんだよ。そして休みの時間に教場にいたのはきみだけじゃないか。」

と、少しことばをふるわせながら言い返しました。

ぼくはもうだめだと思つと、急に頭の中に血が流れこんで来て、顔がまっかになつたようでした。するとだれだったか、そこに立つていたひとり、いきなりぼくのポケットに手をさしこもうとしま

した。ぼくはいっしょうけんめいにそうはさせまいとしたけれども、多勢に無勢でとてもかないません。ぼくのポケットの中からは、見る／＼マール球（今のビー玉のことです。）や鉛のめんこなどといっしょに、二つの絵の具のかたまりがつかみ出されてしまいました。「それ見ろ。」と言わんばかりの顔をして、子供たちは憎らしそうにぼくの顔をにらみつけました。ぼくのからだはひとりでにふるふるえて、目の前がまっ暗になるようでした。いいお天氣なのに、みんな休み時間をおもしろそうに遊びまわっているのに、ぼくだけはほんとうに心からしおれてしまいました。あんなことを、なせしてしまつたんだらう。取り返しのつかないことになつてしまった。もうぼくはだめだ。そう思つと、弱虫だつたぼくは、さびしく悲しくなつて来て、しく／＼と泣きだしてしまいました。

「泣いておどかしたつてだめだよ。」

と、よくできる大きな子が、ばかにするような、憎みきつたような声で言つて、動くまいとするぼくを、みんなで寄つてたかつて二階に引張つて行こうとしました。ぼくはできるだけ行くまいとしたけれども、とう／＼力まかせに引きずられて、はしご段を登らせられてしまいました。そこにぼくの好きな受持の先生のへやがあるのです。

やがて、そのへやの戸をジムがノックしました。ノックするとは、はいつてもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「おはいり。」という先生の声が聞えました。ぼくは、そのへやにはいる時ほどいやだと思つたことはまたありません。

何か書き物をしていた先生は、どや／＼とはいつて来たぼくたちを見ると、少し驚いたようでしたが、首の所でぶつりと切つた髪の毛を、右の手でなで上げながら、いつもの通りのやさしい顔をこち

らに向けて、ちよつと首をかしげただけで、なんの御用、というふうをなさいました。そうすると、よくできる大きな子が前に出て、ぼくがジムの絵の具を取ったことを詳しく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔つきをして、まじめに、みんなの顔や、半分泣きかゝっているぼくの顔を見比べていらつしゃいました。ぼくに、「それはほんとうですか。」とおききになりました。ほんとうなんだけれども、ぼくがそんないやなやつだということを、どうしてもぼくの好きな先生に知られるのがつらかったのです。だからぼくは、答える代わりにほんとうに泣きだしてしまいました。

先生はしばらくぼくを見つめていましたが、やがて生徒たちに向かって、静かに、「もう行つてもよろこびます。」と言って、みんなを帰してしまわれました。生徒たちは少し物足らなそうにどや／＼と下へ降りて行つてしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、ぼくの方も向かずに、自分の手のつめを見つめていましたが、やがて静かに立つて来て、ぼくの肩の所を抱きすくめるようにして、「絵の具はもう返しましたか。」と、小さな声でおっしゃいました。ぼくは、返したことをしつかり先生に知ってもらいたいので、深々とすなずいて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだと思つていますか。」

もう一度そう先生が静かにおっしゃつた時には、ぼくはもうたまりませんでした。ふる／＼とふるえてしかたがないくちびるを、かみしめてもかみしめても泣き声が出て、目からは涙がむやみに流れて来るのです。もう先生に抱かれたまゝ、死んでしまいたいような心持になつてしまいました。

「あなたはもう泣くんじやない。よくわかつたらそれでいいから、泣くのをやめましょう、ね。次

の時間には教場に出ないでもよろしいから、私のこのおへやにいらつしゃい。静かにしてこゝにいらつしゃい。私が教場から帰るまでこゝにいらつしゃいよ。いい。」とおっしゃりながら、ぼくを長いすにすわらせて、その時また勉強の鐘がなつたので、机の上の書物を取り上げて、ぼくの方を見ていらつしゃいました。二階の窓まで高くは上がったぶどうづるから、一ふさの西洋ぶどうをもぎ取つて、しく／＼と泣き続けていたぼくのひざの上にそれを置いて、静かにへやを出ていらつしゃいました。

一時がや／＼とやかましかつた生徒たちはみんな教場にはいつて、急にしんとするほどあたりが静かになりました。ぼくはさびしくつてさびしくつてしようがないほど悲しくなりました。あのくらい好きな先生を苦しめたかと思うと、ぼくはほんとうに悪いことをしてしまつたと思ひました。ぶどうなどはとても食べる氣になれないで、いつまでも泣いていました。

ふと、ぼくは肩を軽くゆすぶられて目をさました。ぼくは先生のへやで、いつの間にか泣き寝入りをしていたとみえます。少しやせてせいの高い先生は、えがおを見せてぼくを見おろしていらつしゃいました。ぼくは眠つたために氣分がよくなって、今まであつたことは忘れてしまつて、少し恥ずかしそうに笑い返しながら、あわてて、ひざの上からすべり落ちそうになつていたぶどうのふさをつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して、笑いも何も引っこんでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしなくてもよろしい。もうみんなは帰つてしまいましたから、あなたもお帰りなさい。そして、あしたはどんなことがあつても学校に來なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと、私は悲しく思いますよ。きつとですよ。」

そう言つて、先生はぼくのかばんの中にそつとぶどうのふさを入れてくださいました。ぼくは、い

つものように、海岸通りを、海をながめたり船をながめたりしながら、つまらなく家に帰りました。そして、ぶどうをおいしく食べてしまいました。

けれども、次の日が来ると、ぼくはなか／＼学校に行く気にはなれませんでした。おなか痛くなればよいと思ったり、頭痛がすればよいと思ったりしたけれども、その日に限って、むし歯一本痛みもしないのです。しかたなしに、いや／＼ながら家は出ましたが、ぶら／＼考えながら歩きました。どうしても学校の門をはいることはできないように思われたのです。けれども、先生の別れの時のことばを思い出すと、ぼくは先生の顔だけは、なんととっても見たくてしかたがありませんでした。ぼくが行かなかつたら、先生はきっと悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい目で見られたい。たゞその一事があるばかりで、ぼくは学校の門をくゞりました。

そうしたら、どうでしょう。まず第一に待ちかねていたようにジムが飛んで来て、ぼくの手を握ってくれました。そして、きのうのことなんか忘れてしまったように、親切にぼくの手をひいて、どきまぎしているぼくを先生のへやに連れて行くのです。ぼくはなんだかわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くの方からぼくを見て、「見ろ、どうぼうのうそつきが来た。」とでも悪口を言うだろうと思っていたのに、こんなふうにされると、氣味が悪いほどでした。

ふたりの足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に戸をあけてくださいました。ふたりはへやの中にはいりました。

「ジム、あなたはいい子。よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまつてもらわなくなってもいいと言っています。ふたりは今からいいお友だちになれば、それでいい

んです。ふたりとも、じょうずに握手をなさい。」

と、先生はにこ／＼しながらぼくたちを向かい合わせました。ぼくは、でもあんまり勝手過ぎるようでもじ／＼して、いますと、ジムはぶら下げていたぼくの手をいそ／＼と引つ張り出して、堅く握ってくれました。ぼくは、もうなんと行ってこのうれしさを表わせばいいのかわからないで、たゞ恥ずかしく笑うばかりありませんでした。ジムも氣持よさそうに、えがおをしていました。先生はにこ／＼しながら、ぼくに、

「きのうのぶどうはおいしかったの。」

と聞われました。ぼくは顔をまっかにして、「え、。」と白状するよりしかたがありませんでした。

「そんなら、またあげましょうね。」

そう言って、先生はまっ白なリンネルの着物につままれたからだを窓から伸び出させて、ぶどうの一ふさをもぎ取って、まっ白い左の手の上に粉のふいた紫色のふさを載せて、細長い銀色のはさみでまん中からぶつりと二つに切って、ジムとぼくとにくださいました。まっ白い手のひらに紫色のぶどうの粒が重なって載っていたその美しさを、ぼくは今でもはつきりと思い出すことができます。ぼくはその時から、前より少しいい子になり、少しはにかみやでなくなったようです。

それにしても、ぼくの大好きなあのいい先生はどこに行かれたのでしょうか。もう二度とは会えないと知りながら、ぼくは今でも、あの先生がいたらなあと思います。秋になると、いつでもぶどうのふさは紫色に色づいて、美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手は、どこにも見つかりません。

(有島武郎全集)

研究

- 一 この少年は、どうして人の絵の具を盗むようなことをしたのであるか。
- 二 「なんのためだか知らないが、ぼくはあっちこっちをむやみに見まわしてから、手早くその箱のふたをあけて」の「なんのためだか知らないが」などに、少年のどういう心の動きが現われているか。
- 三 なんでもほしければ買ってもらえる家庭に育ちながら、両親に絵の具を買ってくださいと言えない少年のおくびょうさは、この文章の中でどういう役目をしているか。
- 四 この少年は、盗みをしてからさびしくなったり悲しくなったりしているが、どうしてさびしくなったり悲しくなったりしたのであるか。
- 五 盗みをしたことに対して、どう思っている

- 六 先生は、どうして「あしたはどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。」と言ったのであるか。
- 七 どうしてジムは、あくる朝、この少年を待っていてくれたのであるか。
- 八 からだも心も弱い、おくびょう者で言いたいことも言わずに済ますようなたちのこの少年が、前よりも少しいい子になり、少しはにかみやでなくなったのは、何の力によるのか。
- 九 「一ふさのぶどう」という題は、どうしてつけたのであるか。みんな話してみよう。
- 十 読後感を書いてみよう。
- 十一 はにかまないで自分の思っていることをはっきり言うことのできるように、心もからだも強くして行こう。

〔四〕はだかの王様

アンデルセン

この童話は、アンデルセンの童話集「子供のためのお話」の一編を翻訳したものである。アンデルセンは、西暦一八〇五年デンマークに生まれた文学者で、わが國にも森鷗外（もりおうがい）の訳でよく知られている。「即興詩人」という小説などのほかに、いろ／＼な小説や戯曲や童話などを書いている。童話作家としては、ドイツのグリム兄弟とともに、世界的に名声を博しており、「絵のない絵本」などがある。グリムの童話は、昔から言い傳えられていたものに手を加えたものであるが、アンデルセンのは、自分で新しく作ったものである。父は貧しいくつ作りの職人であったが、話が好きで、「千一夜物語」という古いおとぎばなしの中から、よく子供にもしろい話をして聞かせた。アンデルセンが、自分でも童話を書くようになったのは、この父の感化であるといわれる。

もう幾年か前、ある國に新調のお召し物を着ることが何よりもお好きな王様が、ありました。この王様は、様はありったけのお金をかけて、なんでもりっぱに見られたいとばかり願っていました。この王様は、家來もかわいがらなければ、芝居へもお出かけになりません。たまたに公園へ馬車を走らせるといっても、それは変わったお召し物を人民に見せるためでした。もう晝間は一時間ごとにお召し替えて、「よく「王様は会議の間に。」ということばがありますが、この場合にはきまって、「王様は衣裳（しやうじやう）の間に。」というようありさまでした。

王様のおいでになる大きな都は、いつもたいへんなにぎわいで、毎日たくさんの外國人がよそからやって來ました。ある時、その中にまじって、ふたりの詐欺師（さぎし）がやって來ました。ふたりは、自分た

ちは機織りだが、まあ／＼なんでもそれ以上考えようのないりっぱな織物を織ると言いふらしました。その着物の色合いなり模様なりがみごとばかりでなく、その織物で作った着物には、不思議な性質があつて、なんでも、自分の身分に相應しない者とか、どうにもならないやくざ者には、その着物は目には見えないというのでした。

王様はそれを聞いて思うには、

「なるほどそれはちよほうな着物だな。わたしがそれを着れば、この國でだれが身分に相應しない人物であるか見つけ出すこともできるし、りこうとばかの見分けもつくわけだ。よし、さっそくその織物を織らせることにしよう。」

こう思うと王様は、ふたりの詐欺師にたくさん前金をやって、さっそく仕事を始めるように言いつけました。

さて、ふたりの詐欺師は、機を二台すえつけて、機を織るまねをしました。けれども、機には何も置いてはなかつたのです。さっそく一番上等な絹と一番値段の高い金糸を注文しましたが、これは自分のふところにしまいこんでしまって、あい変わらずからっぱの機に向かって、夜おそくまで、とんからり、とんからりやっていました。

「さて、どのくらい織れたか見たいものだ。」

と王様は思いましたが、やくざな人間や自分の身分に相應しない者には見えないというので、少し氣味が悪くなりました。何も自分はそんなことをこわがる必要はないと思ひこんでいましたが、まずだれかほかの者をやって、どんなふうだか様子を見させることにしました。何しろ都じゅうの人は、今ではみんなこの織物がどういふ不思議な力を持っているかということを知っていました。それで、お互に手ぐすねひいて、一体なかまのだれがばかなやくざな人間だか見てやりたいと待ちきつてるところでした。

「よし、機織りの所へは、あのもったいらしい老大臣を見せにやろう。あれなら分別もあり、職務に忠実なことは第一等のわけだから、きっとよく見届けて来るに違いない。」

さて、忠義な老大臣は、ふたりの詐欺師がからっぱの機を織っている廣間へやって來ました。

「やれ／＼たいへん。」と大臣は思いました。そして、両方の目をできるだけ大きくあけました。

「わたしにはまるで何も見えない。」

けれども、大臣はそれを口に出しては言いませんでした。

ふたりの詐欺師は、どうかそばに寄って見ていたゞきたいと言って、それから、色合いやしまがらはお氣に召したろうか、などと尋ねました。その時、ふたりはからっぱの機を指さしました。かわいそうに、おじいさんの大臣は、いよ／＼裂けるほど目を見開きましたが、何も見えませんでした。なせなら、見たくても、てんでなんにもなかつたのですから。

でも、大臣はこう思いました。

「やれ／＼、おれはそんなにばかなのかなあ。おれはそうは思わなかつた。だれにもそれがわかるはずはあるまい。おれは大臣の職に相應しない人間なのかな。いや、おれには織物が見えなかつたなどと人に言つてはなるまいぞ。」

「さて、何かおっしゃっていただけませんか。」と、詐欺師のひとりが言いました。

「あゝ、いや、みごとなものだ。実にすばらしいものだ。」と、大臣はめがね越しにのぞいてみて言いました。「いや、模様といい、色合いといい、恐れ入ったものだ。——よろしい、玉様にはわしが非常に満足したことを申し上げよう。」

「そうですか、それはありがとうございます。」

と、ふたりの機織りが言って、それからまた色の名の説明をしたり、珍しい模様の話をしたりしました。大臣は熱心に耳を傾けました。よく聞いておいて、玉様の所へ帰って行って、それをおうむ返しにくり返すつもりでした。そして、その通りにやりました。

そこで詐欺師は、また機を織る上に入用だと言って、その上のお金や、絹や、金糸などを請求して、それをみんな隠しにしまこんで、あい変わらずからつばの機にかゝって、とんからり、とんからりやっていました。

玉様はまたすぐと、ほかの役人をやって、機がどういうふうに進んでいるか、もうじき織物ができあがるか、見せにやりました。この役人も前の大臣と同じように、いくらためつすがめつながらても、からつばな機織り台のほか、何もありませんでしたから、したがってやはり何も見ることができませんでした。

「どうです、りつばな織物ではありませんか。」

と、ふたりの詐欺師は言いました。そうして、そこにありもしないきれいな模様のことを、いろいろ

と述べ立てました。

「おれはほかではないぞ。」と、その役人は考えました。「そうすると、おれは自分に相應しない役目についているというわけだ。すいぶんばかげた話だが、それを人に知られてはなるまい。」

そこでこの男も、自分の見もしない織物をほめ立てて、美しい色合いや模様をおもしろく思うと言いました。

「さよう、全くすばらしいものでございます。」

と、帰って玉様に申し上げました。

都の人は、寄るとさわると、その御たいそうもない織物の話をしあいました。

そのうち、玉様は、織物がまた機に乗っているうち、一度自分の目で見たいと思いましたが、そこで、えりぬきの家來をお、せい引き連れて、その中にはそこへ見に行ったことのあるふたりの正直な家來もまじって、ふたりの狡猾な詐欺師がたて糸もよこ糸もなしにせつせと機を織っている所へ、そろそろ見物に出かけました。

その時、忠義なふたりのお役人は言いました。

「どうもみごとではございませんか。あの模様といい、色合いといい、玉様にはさだめしお氣に召したことでございましょう。」

こう言って、ふたりはからつばな機を指さしました。なせと云って、ふたりともほかの人たちには織物の形が見えるものと思っていたからです。

「はて、これはどうしたものだ。おれにはまるで何も見えない。ひどいことだ。おれはばかなのか

しら。おれは王には相應しない人間なのかしら、これこそ一生の大事件だ。——王様はこう心のうちでは思いながら、わざと大きな声で、

「お、なか／＼みごとだ。ほめてつかわずぞ。」こう言つて、さも満足らしくうなずいて、からっぽな機をながめました。それは、何も見えないとは言えなかつたからです。お供に連れて来た家來たちもいっしょになつて、さん／＼、穴のあくほどながめました。やはり同様何も見えませんでした。でも、王様と同じように、

「はい、なか／＼みごとで。」

と言いました。そしてこのすばらしい新調のお召し物を、近くあるはずの大式典の行列のおりお召しはじめになるようにすゝめました。

「目がさめるようだ。みごとなものだ。たいしたものだ。」

と、みんな口から口へ言いあいました。感嘆の声がわくように起りました。王様はふたりの詐欺師に、めい／＼騎士勲章をボタンの穴にさげさせ、あらためて「王室機織師」の称号を授けました。

いよ／＼行列があるというその前の晩かゝつて、詐欺師は仕事をしあげました。その晩は、十本以上のろうそくがかん／＼ついていました。だれにも、王様の新調のお召し物をしあげるために、徹夜の働きをしていると思われました。詐欺師は機から織物をおろすようなふうをして、それから、大きなはさみでからのきれを切るまねをしました。糸もない針でちく／＼やつて、とう／＼、

「さあ、お召し物ができあがりました。」
と言いました。

王様は一等身分の高い貴族たちを連れて、御自身お出ましになりました。すると、ふたりの詐欺師は、何か引つ張つてでもいるように片手を上げて、

「さあ、ごらんあそばしませ。これがおズボンでございます。これがお上着でございます。これがおがითうでございます。それから、これがあれ、これがそれでございます。もうくもの糸のように軽くて、何も召していないようにお思いでございます。が、これこそこの織物のすぐれたところなのでございます。」

「さよう、さよう。」

と、貴族たちは残らず口をそろえて言いました。そのくせ、何も見えはしませんでした。それもそのはず、何もないのでしたから。

「王様にはお召し物をお脱ぎあそばしますか。そういったしましたら、あの大姿見の前で新調のお召し物をお着せもうすでございます。」

と、詐欺師は言いました。王様は服を脱ぎました。すると、詐欺師は新調の服を一つ／＼着せるようなふりをして、腰のまわりにとりついて、何かそこをしめるようなかっこうをしました。これはマントをつけるまねでした。王様は姿見の前でからだを前うしろにひねくりました。

「お、まことによくお似合ひあそばします。どうもおみごとなことでございます。どうも模様といい、色合いいい、恐れ入ったお召し物でございますな。」
こんなことを、みんなは言いました。



「王様のお行列にさゝげているはずの天蓋かきを用意いたして、あちらに控えております。」

と、式部長官が言いました。

「よし、したくはいいぞ。」と、王様も答えました。「どうだ、よく似合ったであろうが。」こう言って、またも王様は姿見に向かいました。なんでも自分の衣裳に見とれているふうをしなければならぬと思つたからです。

マントのすそをさゝげる役の式部官たちは、床に手を触れるほどにして腰をかぎめました。それは、さもマントの端を手に持っているように見えました。それから、そのまゝ何かを空にさゝげるような形をして立ち上がりました。何も見えないということを人に気づかれまいとばかりしていました。

そこで、王様はりっぱな天蓋の下にはいつて、行列を作つてねりだしました。往來や窓ぎわに立つて拜観する者も、

「どうも王様の新調のお召し物はみごとなものだね。あのマントのすそのりっぱさはどうだ。実によくお似合いになるではないか。」

と言ひあいました。だれも自分だけ見えないと思われたくありませんでした。なせなら、それは自分が身分に相應しない人間であるか、またはひどいやくざ者だということを白状することになるからです。この王様のお召し物の中で、これだけの評判をとつたものはこれまでにありませんでした。

「でも、あの人、なんにも着ていないや。」

と、ふと、ひとりの子供が叫びました。

「いやはや、聞いたか。子供というものは罪のないことを言うものだ。」

と、その父親が言いました。やがて、子供の言ったことがそれからそれへとさゝやられました。

「あの人、なんにも着ていないのだ。子供はそう言っているせ。何も着ていないと言っているせ。」

「でも、ほんとうに何も着ていないのだからなあ。」

と、とうとう残らずの人が言いました。すると王様は、自分にもみんなの言うことがほんとうらしく

思われるので、このことは胸にすきんと來しました。でも、

「いや、おれはどこまでも堂々と行列を続けなければならぬ。」

（現代日本文学全集——梅山正雄訳）

研究

一 「王様は会議の間に。」 「王様は衣裳の間に。」

とはどういうことか。この下に「お出ましでございます。」 「いらっしゃいます。」などを補つ

て考えてみよう。

二 王様はどうして詐欺師のいう着物をちょう

三 感想のまとめ方

はうな着物だと考えたのであろう。

「それを着れば、この國でだれが身分に相應しない人物であるか見つけ出すこともできるし、りこうとばかの見分けもつくわけだ。」の「それを着れば」の下に、適當なことはを、補つ

て考えてみよ。

三「からっぽの機」とは、どういうことか。

四「子供というものは、罪のないことを言うものだ。」という意味を考えてみよ。

五 子供はほんとうのことが言えるのに、おとなには、どうして、ほんとうのことが言えないのだろうか。人からばかだと思われること、自分がその身分や地位にふさわしくないと思われることなど、おとながどんなに恐れて

いるかを考えてみよう。

六 どうして、王様は、最後まで、みんなの言うことをほんとうにしないで、「いや、おれはどこまでも堂々と行列を続けなければならん。」と思ったのであろう。

七 この童話の読後感を書いてみよう。

八 自分が見たまま、信するまゝを言うことがどんなにむずかしいか、自分の経験を通して反省して作文にしてみよう。

四 質問と解答

ラジオの「なかよしクラブ」の時間に、「私たちのちえ袋」が放送されるようになったのは昭和二十年の十月であるが、この放送は非常に聞き手の興味をひいたらしく、「ちえ袋」の係に送られた質問のはがきは、多い時には日に三百通、少ない時でも五十通近くもあつたという。質問は、ふだん、「なせだろう」と疑問にされていたことが、はがきで放送局に送られ、放送局では、それに対して、それ／＼の専門家に依頼して解答してもらつたのである。この放送の目的はすべてのものごとを、できるだけ細かに、また詳しく観察して、

それを科学的に順序立てて考えてみるという習慣をつけ、またそういう力を養つて行こうというのであつた。

ところが、この「ちえ袋」は、一度放送されただけでは聞き落すこともあり、あとになつて改めて研究しなおそうと思つても不便だから、せひ書物にまとめてほしいと希望する人が多かつた。そこで放送局では、実際に放送されたものの中から適当な問題を選び、「私たちのちえ袋」として出版した。

こゝに抜き出したのは、その書物のわずか数章だけであるが、科学的なものの考え方や質問のしかた、解答のしかたについての参考としよう。

〔一〕 私たちのちえ袋

日本放送協会

○魚はどうして眠りますか。

ほとんどすべての魚にはまぶたがありません。ですから目をつぶるといふことがないのです。しかし、目をつぶるといふことと、眠るといふことは別でありまして、魚は目をつぶることはできませんが、りっぱに眠ります。目をつぶらずにどうして眠れるかと思われようが、みなさんは、眠る時、耳を閉じて眠りますか。

たとえば、今こゝに眠る時に耳を閉じる動物があつて、それが私たち人間を見て、人間は耳を閉じないから眠ることはないのだからと言つたら、みなさんは承服なさいますか。魚は目を閉じないから眠らないだろうというのは、それと同じことです。

魚は眠ります。そして、眠っている間には、私たちが手でつかむこともできません。けれども、何時間くらい眠るかということは、はっきりとはお答えできません。魚によって、晝間眠るものもあれば、夜眠るものもあり、また、その時間もまち／＼で、きまってはおりません。(丘 英通)

○人間はどうして眠るのですか。

なせ眠るかということは、まだよくわかっていないのです。しかし、こうではないかという想像はされておりますから、その幾つかをお話ししましょう。

私たちは晝間激しい仕事をした時など、夕方になって、とても眠くなります。つまり、疲れると眠くなります。私たちが筋肉をあまり続けざまに働かせていますと、おしまいは筋肉がいうことをきかなくなりますね。あの時には、筋肉が激しく働いたために、筋肉の中に何か物質がたまって、そのために疲れが起るのだと考えられております。これと同じようなことが、脳の中でも起るのだと想像されます。そのために脳の働きが鈍くなって、眠ってしまいうらしいのです。

しかし、眠りはたゞ疲れただけで起るものではありません。たとえば、やかましい場所などでは眠りにくいものです。静かな所で、からだのぐあいも、痛くも、かゆくも、寒くも、暑くもないようにした方が眠りやすいのは、みなさん御存じの通りです。

しかし、大きなやかましい音だと決して眠れないかというところ、そうではありません。汽車や電車のようなやかましい音のする所でも、こくりこくりと眠っている人がたくさんあります。これは、同じような音が続いていますと、人がそれほどうるさいと思わなくなるからです。その他、自分にいろいろ

心配ごとがあったり、気にかゝることがあったりすると、なか／＼眠りにくいものです。ですから、こういう眠りを妨げるようなものが取りのけられなければ、眠りは起らないらしいのです。つまり眠たくなる原因が強くなり、眠りを妨げる原因が弱くなるというようにいろいろ組み合わせさせて、人間や動物は眠るものなのです。

それでは、眠るといふのは、脳のどんな働きでしょうか。これは、実はたいへんむずかしいことなのです。

みなさんは流行性脳炎という病氣を御存じですか。この病氣にもいろいろ種類がありますが、すやすやと二日も三日も眠り続けることがあります。この病氣をよく研究したところが、脳の中のある限られた部分が働くと、眠りが起るといふことがわかりました。つまり、私たちの脳の中に、眠りをつかさどっている中心部があるといふのです。こういう中心部が働きますと、私たちがものを考えたりする働きが弱くなり、また一方では脳の働きが神経を傳わることも弱くなり、そのために眠るらしいのです。たとえてみれば、眠りの中心といふのはラジオの機械へ電氣を通じるスイッチを切るような働きをするものであって、そのために電氣が機械へ通じなくなり、電波を受けることも、音を出すこともできなくなるようなものです。

(緒方富雄)

○はまぐりやあさりを切っても血が出ないのに、あかがいを切ると血の出るのはどういふわけですか。

はまぐりやあさりを切ると血が出ないとありますが、出ないわけではありません。たゞ、みなさん

が血と思わないだけのことです。

みなさんは、血は赤いものときめてかゝっているようですね。なるほど、私たち人間の血はまっかな色をしています。しかし、動物の世界を広く見わたしますと、赤い血を持っているのは高等な動物だけで、下等な動物の血は無色に近いのが原則です。たゞ、下等な動物の中にも、例外的に赤い血を持っているものがあり、あかがいなどは、たゞその例外に当たっているわけでは

少しむずかしくなりますが、人間の血とあかがいの血とは、同じく赤く見えても、その原因が違います。人間の血液では、液状の血漿しょうには色がなくて、血球の集まったものが赤い色をしています。ところが、あかがいでは血漿が赤くて、血球は無色です。

言い換えれば、血に赤い色を與えるものは、人間では血球、あかがいでは血漿だということになります。

(丘 英通)

○夕焼けだと翌日はお天気で、朝焼けだとその日はお天気が悪くなるというのはなぜですか。

朝焼けといつても、それは日の出の時、空が赤やだいゝの美しい色に染まる、あれをいうのではなく、こゝでいう朝焼けは、空一面が氣味悪いほどまっかになる時のことをいうのです。

そういうひどい朝焼けの時には、実は空の高い所にちよつと氣がつかないような薄い雲が一面にあるのです。そして、それがまっかに染まっているのです。つまり、空の高い所では、もうお天気が悪くなりはじめているので、そんな雲が出るのです。この薄い雲をいらさ雲いらさといっておりますが、朝焼けは、つまりこのいらさ雲がまっかに染まることなのです。

それから夕焼けのことですが、お天気が、西から東へだんゝ変わって行くものです。ですから、美しい夕焼けは、西の空が晴れているということですし、したがって、次の日は、その西の空が眞上に移つて来るのですから、お天気がよいと考えてよいわけです。けれども、夕焼けでも氣味悪いほど赤黒い時には、やはり、あとで雨になったり、荒れ模様になったりすることがよくあります。それは、夕日が空をおゝっている薄い雲に反射するからで、この雲の動きのためにお天気が変わることがあるのです。これでおわかりになったことと思います。

夕焼け・朝焼けといつても同じ性質のものではなく、夕焼けでもお天気が悪くなるものもあり、朝焼けのうちでも、朝日が青空に反射してできる赤やだいゝの美しい朝焼けは、お天気が悪くなる前ふれではないのです。こゝを区別しましょう。

また、空模様が変わるのは急ですし、所によって違いもありますから、みなさんで一つ、夕焼けの翌日ほんとうにお天気がよかつたか、あるいは、朝焼けのちお天気が悪くなったかどうか、實際を詳しく書きとめてごらん下さい。

また、天気予報と比べてみるのもおもしろいでしょう。これを長く続けているうちに、実際に役立つことが、きっとたくさん出て来るでしょう。

(高橋浩一郎)

○なぜ夢を見るのでしょうか。

実は、今の世界じゅうの学者もやはり、「夢はなぜ見るのだろうか。」と考えているのです。

今確かにわかっていることは、眠っている時でない夢を見ないということです。また、「ぐっす

り寝入っている時には夢を見ない。」ということもほんとうのようです。すると、夢は眠りがそう深くない時、あるいは眠りが浅い時に見るものだと考えそうです。ところで、寝ている人が手や足を動かしたり、寝返りを打ったり、寝言を言ったりすることがありますね。これもやっぱり、ぐっすり寝入っている時にはないことで、手や足を動かしたり、寝返りを打ったりすることは脳の働きによって起ることであって、脳から命令が神経を傳わってそれらの筋肉にまで届き、それによって筋肉が働いて起ることなのです。ですから、その時は脳は確かに働いているのです。

そして、これと夢を見るのとは関係があつて、いつか見たことや、いつかしたことなどを脳がおぼえていて、寝ている時に少し脳の働きが起つて、それが目で見ているような「つもり」になる、つまりそれが夢だろうと考えられるのです。

夢がどこかほんとうと違つていたり、ほんとうにあるはずがないようなことであつたりするのは、脳の働きが、起きている時のようにちゃんと順序立つて働かないからだろうと考えられます。

このように、私たちが寝ていても、脳はやっぱり少しずつ働いているのであつて、その働きが運動に関係がある時には、寝ながら手や足を動かしたり、寝返りを打ったりする運動になりますし、更に脳の働きが目で見たり耳で聞いたりすることに関係のある時には夢になると考えてよろしいでしょう。

しかし、たゞ、夢は見たり聞いたりする脳の働きにだけ関係があるわけではなくて、そのほかのいろいろなことに関係があるようです。次に夢の長さ、きっかけについてお話しましょう。

みなさんは、夢で野原へ出ておもしろく遊んで帰つてきたり、空をふわりふわりと飛びまわつたりするようなことがあつたに違いありません。

それでは、夢はそれだけの長さの間見ているのでしょうか。これはよく考えてみなければならぬことです。たとえば、野原へ出て遊んで帰つて来るなどといえは、二時間も三時間も、または半日もかゝるかもしれません。しかし、実際にはそう長く夢はみていないのです。もつとも、この遠足のところどころを見ているというようなことはあるかもしれませんが。また、ほんとうにすうつと続いている夢を見ることもあります。

それなのに、どうしてもそれだけの時間夢を見ていたと考えられないことが多いのです。どうも、夢はあとで考えるほど長い間見ているのではないらしいのです。

それではなぜ夢がそんなに長く感じられるのでしょうか。それは、私たちは夢を見ている時に時間をはかつているのではなくて、目がさめてから夢を思い出さずからなのです。夢は実際には、ほんの二、三秒ぐらいしか見ていなくても、あとで思い出して、あの次にこれ、この次にあれ、というふうな順序を立てて並べてみると、すいぶん長いできごとになってしまうらしいのです。みなさんは目ざまし時計をかけて寝ることがあるでしょう。その時計の音が、夢の中で大きな鐘か大砲の音などになって、何かの役目をするところがあるでしょう。実際、夢はすつと前から続いて、その一番おしまい、ちようどうまいぐあいに鐘の音がしたり大砲が鳴つたりして、そして目をさます、というようなことがありますね。

そういう時に、もうそろ／＼目ざまし時計が鳴りそうだとするので、夢をそろ／＼見はじめるというような、そんなおかしなことがあるはずはないのです。こういう時にはきつと目ざましが鳴りはじめてから目がさめるまでの二秒か三秒というごく短い時間の間に、さつと夢を見てしまつて、そして

目をさますらしいのです。それをあとから思い出して、順序よく並べると、一つのまとまったできごとになって、その一番おしまいに何かの音がしたように感じる……。こういうふうを考えられています。さて、夢を見るきっかけはいろ／＼ありますが、そのきっかけはたい目がさめるきっかけになっているものが多いのです。さっきの目ざましの音などはよくあるものですが、そのほかに、夢の中で足が重くてどうしても歩けなかったというような時、目がさめて見ると、一方の足の上にもう一方の足が乗っていたり、重い物が足の上に乗っていたりするのを見つけたことは、みなさんが御存じの通りです。

胸に手を当てて寝ると、こわい夢を見るといふのも確かなようですが、この時には、息をする運動がじゃまをされていたりして、そのために酸素の吸いこみ方が少なくなつて、眠っている間でも、脳の働きが変わつて来るということも考えられます。

このように、夢のことはわからないことがすいぶん多いのですが、夢はあとで思い出した時の長さだけ見ているわけではないということは、たいへんおもしろくもあり、また、たいせつなことで、これからみなさんが夢のことをいろ／＼考える時のよい参考になると思います。 (緒方富雄)

研究

一 科学的知識を持っているということと、科学的なものの考え方ができるということとは同じことか。違っているとすればどういう違いがあるか。

二 この問に対する解答者は、この問をどの意味に解釈した上で解答しているのか。解答の内容から調べてみよう。

二 ある連続放送がまとめられて書物になるとを希望する場合、われ／＼はどうすればいいか。放送局あてに、はがき、または手紙を出すのも一つの方法であろう。そういう場合の手紙文を作ってみよう。

三 「どうして」ということばには、「なぜ」という意味で、その原因や理由が問題になっている場合もあれば、「どんなやり方で」という意味で、その方法や順序を問題にする場合もある。また理由をきく場合に、たゞ単にそれがわからないできく時であれば、「そんなことはあるはずがないのに」といった疑いの氣持をもってきく時もある。このように、その時、その場合によっていろ／＼に解釈されることばは、どんな時に都合がよく、どんな時に都合が悪いか。

四 イ 「魚はどうして眠りますか。」という問の意味はどうか。何がわからないで尋ねているか。

五 右の問を出した人は、魚は眠らないと考えたのであろうか、それとも魚の眠り方がわからなかったのであろうか。この質問のしかたで、そのどちらであるかがわかるか。

六 「人間はどうして眠るのですか。」という問に対して、どんなことがらが答えられているか。睡眠の方法か、理由か、原因か、それとも状態か。

七 はまぐりやあさりの血についての問題の出し方について考えてみよう。

八 この質問者は、血というものをどんなものと考えていたのか。

九 この解答者が更に進んで人間の血とあかがい血とがどう違っているかについても説明を加えているのは、どんな心づかいからか。

四 質問と解答

八 夕焼けや朝焼けについての解答を読むと、一般の言い方とは反対に「夕焼けだと翌日は天気が悪くなり、朝焼けだとその日はお天気になる。」というような言い方もできてよさそうに思われないか。この点について研究してみよう。

九 夢の問題についての問答を読んで、感想を話しあおう。

十 この解答者は、この間に対して、どんな場

合に夢を見るか、夢に関係のありそうなことは何か、夢を見ている時間の長さなど、いろいろの方面から、夢というものを考えようとしている。このようにまちがいはなく証明され、認められた事実の上に立って、まだ明らかにされていない点をはっきりさせることが研究上たいせつなことである。この解答のしかたから、科学的なものの考え方を学ぼう。

五 文章の作り方・なおし方

われ／＼が文章を作る時には、まず自分の言おうとしていることをはっきりさせ、これを文章に表わすようにしなければならない。それには、適当に文章の長さを考え、一度にあれも言おう、これも言おうなどしないで、材料を整理して、「一つの文章には一つの思想を。」の原則で書いて行くべきである。一つの文章には一つのまとまりがなければならぬ。二つも三つもの思想を一度に書き表わすようなことは避けなければならない。二つも三つものことを言おうとする時には、文章を適当に長くして、幾つかの段落から成る文章を作るようにしなければならない。

短い文章でよい時には、それ／＼中心語句を持つ文が幾つか集まって「幾つかの文から成る文章」となり、それにはまた中心をなす文や思想があるように書くべきである。長い文章を書く必要のある時には、こういう、幾つかの文の集まりから成る文章が、大きな文章の一句切りとなって、そういう段落を成す文章が幾つか集まって大きな文章となり、それに全体を引き締める大きな段落や思想があるというふうによく書くべきである。そして、文と文、段落と段落との間には、あとが前を受けて発展して行くというような緊密な連絡が必要である。すなわち、材料が整い、そのまとめ方がせいとんされ、その一つ／＼の文がきちんと述べられるようにすべきである。

この時、物語とか小説とかのようになると、どこで、いつ、だれが事件に関係して、どういう事件が、なぜ、どのようにして起ったかを書き表わす必要がある。また、おもしろくするためには、そういう、時とか所とかの背景のもとに人物が活躍して行く上に、「やま」をくふうし、その「やま」を巧みに解決して行く必要がある。

以上は、材料が整い、主題がきまつて、それをどういふ構想で敘述して行くかの道筋を述べたものであるが、その前に、こういう文章が書けるようになるためには、物の眞実をよく見きわめるようになっていなければならない。この課には、そういう、作文上達以前の問題を中心にし、自分で文章を書いたりなおしたり、また、他人の文章をなおす時などの問題にも触れた文章をあげておいた。本文をよく読み、設問をよく研究して、作文上達

に努めよう。なお「一 はっきりしたことば」を読みなおして、フロベールがモーパッサンに與えた教えのことばなどを味わってみよう。

〔一〕 文章私感

石坂洋次郎

昔のことを考えてみる。——私は生來文章がへただった。今もじょうずではないが、ともかくも一つの道に年功を積んだおかげで、自分の思うことだけは曲がりなりに表現できるようになった。確かに一つの進歩である。

小学校時代のことは忘れたが、中学校にはいつてからは、作文の評点に甲をつけられた覚えはまずない。乙が普通で、丙の上、甲の下と両てんびんに動いていた。作文の先生はM先生といった。和漢の古典に通曉し、兼ねて近代文学にも一隻眼を有しておられた。だからこの先生に読まれた作文は、見方の古さ・新しさなどというのがれ道はありえず、つけられた評点通りの實力であることを、われひとともに納得しなければならなかった。

私たちはそのころ軟文学にふけておった。軟文学というのは、詩歌や小説の類を侮蔑的に呼称したのであるが、その軟文学のなかまで、私ほど作文の点が劣ったものはいなかった。よほど残念であった。作文が返されると、なかまの者は進んでお互に見せあったが、私だけは、いつも、はなをかんだり、ちぎって紙くす箱に捨てたりして、他人には決して見せなかった。しかし、心中怏々として樂しまなかつた。

ある時、私は日ごろの不名誉を一挙に挽回するつもりで、三晩ばかり夜ふかしをして、十五枚ほど

の小説ふうのものを書きあげ、次の作文の時間に、昂然としてM先生にさし出した。先生はにやりとされて、

「ほう、書いたな……。」

と言われた。私はうれしかった。その日の放課後、私はM先生のいる監督室に呼ばれて行った。胸がときめいた。

「きみのもの、読んだ……。だいぶ力作だな。まずかけたまえ。」

先生は、また火ばちをして、銀縁の老眼鏡にはあゝ息を吹っかけておられた。

「きみは文学を専門にやってみようかな。」

「——そうです、専門に……。」

私はおうむ返しに答えた。というのには、はっきりした自信がなかったからで。

「ふん。むずかしいことだぞ。きみには芽はあるかもしれないが、きみの文章には誤字や脱字がむやみに多いし、それになんというか、教養が浅い、かたよっている。文学は、文章とか作文とかの狭い技術上の問題ではない。生活と密接な関係にある。單に文章だけについて論じても、いい文章というもの、作文だけの練習で産み出されるものではなく、他からの多様な栄養分を攝取しなければならぬものだ。代数でも三角でも歴史でも博物でも——少なくとも中学校で教える学課ぐらゐは常識として一通り消化しておく必要がある。年をとれば必ず思い当たることだろうが、きみの文章にはこの常識的な教養が浅薄なのだ。だから文章がやせている。ゆとりがない。品が落ちる。悪口だけ並べればますこういうわけだな。はゝゝ……。ドストイェフスキーなどの作品はすいぶん偏質的なものに見える

が、偏質もあそこまで到達するには、一般的な教養をきわめ盡くしたあげくのことだ。えらいものだ。どうだな、わが石坂も日本のドストイェフスキーたりうるや否や……。この作品は、記念のため、わししてもらっておこう……。」

先生は、そんな意味のことを、もっと適切なことばでじゅんじゅんとして説かれた。私には先生の御忠言がびったり来なかつた。文章に上達するためには代数や歴史や博物の勉強をしなければならぬ。ばかな。先生は、私になまけ者なので、勉強させる方便にこんなことをおっしゃるのだ。——私はその程度にしか先生のことばを解釈することができなかった。そして、ようかん色にあせた詰めえり服を着て、なた豆ぎせるでじいじい／＼たばこを吸う、古色蒼然たる先生の口から、いとも心やすげにドストイェフスキーやチエホフの名が飛び出すのを、奇蹟に接するような打ちひしがれた心持で傾聴していた。そのころ、私は、長田幹彦や谷崎潤一郎の艶麗幻怪な作風に熱中し、ドストイェフスキーもチエホフも、名まえだけを承知していたに過ぎなかつたから……。

それから十六、七年経過した。しかるにどうだ。昔、M先生が私に戒告した作文上の欠陥は、すっかり今日の私の文章にあてはまる評言ではないか。知性の欠如、描写の混乱、野卑、粗笨、おまけに誤字の頻発と来ては、われながら啞然たらざるをえない。私には進歩がなかつたのか。いや、ある。M先生の親切な訓戒を身にしみて聞くことができなかつた私は、最もうかつな、最も非科学的な自己流のやり方で文章道の修業に終始一貫した。中学を出て大学にはいってからも、私は小説のほかにはほとんど何一つ読まなかつたと言つていい。たゞ一つ、私には、病犬のように執拗な根氣があつた。今日、私の書く文章が、名文家ぞろいの文壇の中に、虫めがね的な存在をかちうるようになったのも、

この根氣のおかげであると考えているが、それにしても、はじめから流れに逆らうような無理な努力方をして、とう／＼／＼までこぎつけたあとを思うと、それだけの意味では私もまた相当なしろものであるのかもしれない。

M先生の忠言は、今日切々と私の胸を打つ。愚鈍な私は、十余年の体験を経てはじめて、「文は人なり。」という金言の意味をさとしたことになる。すいぶんおそい。だが、おそ過ぎるということもないはずだ。私はこれからもう一べん出なおして、ゆがんだ生活をひきなおし、やせがれた教養にあぶらを注ぎ、やがては自分にも満足の行くような文章が書けるようになりたいものと念じている。そして、それについては、十余年前、私の作文に対してM先生が語られた平明率直なおことばを座右の指針とすれば十分であると考へている。

十年一昔という。それがやがて二昔にならうとする。その昔、乙を中心に丙上、甲下とてんびんに動く作文の評点に一喜一憂していた中学生の私は、今は中学校の教師を勤め、國語・漢文・作文などを学生たちに教える身分となつた。実地に教壇に立つて扱ってみると、新しい疑問やら発見やらが続出して、啓発されるところすこぶる多い。

私は作文上達の秘訣として、毎年同じことばをくり返して生徒に教へている。

「ほんとうのことを書くんだ。文章を作るとかいう氣取つた、きゅうくつな構えを捨てて、自分の生活のにおい・色彩・リズムなどを、すなおにそっくり紙の上に表わすように努める。そのほかにはない。」

この注文がいかにもすかしいかは自分でもよく承知しているが、やはりそう言うしかない。困難の

第一は、空漠とした生活環境の中からほんとうのものとそうでないものとをより分けることである。ほんとうと言えばみんなほんとう、投げ出して考えればみなうそのことにも思える。次には、ほんとうのことがつかめたとしても、これをどんなふうに表示するかということがまたむずかしい。これには、光った眞実であると考えたものが、紙の上につぶつてみると、あぶらぎったくす肉に過ぎないことがわかる場合もあれば、技術が及ばず表現に失敗する場合もあろう。こう考えつめて行くと、世の中には文章ほどむずかしいものはないように思われて来る。専門的な立場からは確かにむずかしい。「書は字を写せば足り、文は意を傳えれば足る。」というが、これは悩みぬいたあげくに、のどをからして一喝した三十棒的な警句であらう。「文は意を傳えれば足る。」といったところで、頭を突っこめば身が細るような難問題である。だが、文筆を専門の職業とするのでもない限りは、普通に書ける程度で不足がないものと私は考えている。

くり返して言うが、高い程度で、いい文章が書けるようになるには、眞実を描き、眞実を見ぬく目を怠りなくみがいておくより手段がない。文章も小手先の表現技巧にいかほどき身をやつしても、人をしんから感動させるような文章は書けないはずである。

目が澄めば影像も鮮明になる。栄養の行きわたった、かたよらない、静かな、鋭い視力を備えること。そのような人がらを養い、そのような生活をマスターすること。——鬼神を泣かす底の大文章は、そうした修養の中からのみ生まれ、その意味の文章道は個人の生涯をかけた大事業であるといつてもいい。

(現代文章講座)

研究

- 一 作者は、自分が文章がじょうずになったのは何のおかげだと言っているか。
- 二 「文は人なり。」という意味を、作者はどのように考えているか。
- 三 作者は、作文上達の秘訣としてどういうことを教えているか。
- 四 「文は意を傳えれば足る。」は、どういう意味に解すべきだと言っているか。
- 五 作者の考えでは、「文は人なり。」というふうな考え方と、「文は意を傳えれば足る。」というふうな考え方がどう結びついているか。
- 六 中学生の作文は、どういうものをまず第一の目的とすべきであらうか。
- 七 われ／＼はまず、用語・用字に誤りのない筋の通った文章を書くように努力しよう。それには、短い文章で、ことがらをはっきり書くような練習をしてみよう。
- 八 なお、高い程度でいい文章が書けるように、文学的作文のめばえを伸ばすように努力しよう。
- 九 文章を書く上には、どんな問題、どんな場面を選んだらよいか。
- 十 その問題、場面は、どんな組み立てで書いて行くか。
- 十一 文章の組み立ての中には、中心をなすたいせつな部分が二つも三つもあってよいか。
- 十二 文章を組み立てる一つ／＼の段落、段落を組み立てる一つ／＼の文に中心があり、お互が緊密に關係して続いて行くようにするのは、どういふふうが必要であるか。前の思想のくり返しや、つなぎのことは書き方にどういふふうが必要か。
- 十三 一つ／＼の文や語句をうまく言い表わすのには、どんなふうが必要か。
- 十四 文字やことは正しく書くのには、辞書

をひく必要がある。それには自分の持っている百科辞典・國語辞典・漢和辞典の類のまえがき・使用法をよく読んで、その目的に應じた利用のできるよう十分研究しておこう。

十五 文字の用い方についても、研究してみよう。かな漢字まじり文といわれる、漢字とかなとをまじえて書く日本の文章では、どういうことばを漢字で書くか、かなで書くか、

漢字とかなで書くかがきまっている。ことばによって、漢字の下にかなをつけて書く時、漢字の下につけるかなを「送りかな」という。「行く」「白い」「美しい」「早く」「静かに」などのかな書きの部分が、それである。一つのことばの書き方を、國語の教科書などでよくおぼえておこう。

〔二〕写 生

長 塚 節

この文章は、長塚節が、その郷里に近いある中学校の月刊雑誌に載った中学生の文章に対して與へた批評文であつて、全集には「本誌過去一箇年間の文章について」という題名で收めてある。これが發表されたのは、明治四十二年二月で、節は三十一歳、長編「土」を世に出した前年である。こゝには、その中で批評されている作文のうち二編をもあげておいた。この文章をよく読んで、節の文章観の概略を知るとともに、両者を対照して、文章を書いたりなおしたりする時の参考にしよう。

こゝに言うところは、余が写生文を作る者の立場に於いて見た文章で、議論や説明の文章はその範囲外である。また、言文一致以外の文章もあすからぬ。一言にして盡くせば、過去の一箇年間に於ける本誌上の文章は、漸を追うて進歩してゐる。そうして、最初と最後の比較をしてみると、驚くほどの相違である。近來は語句のあつせんも自在に且つ自然になつて、いかにも心持のよい現象である。以下おもなる作品について短評を試み、いかに進歩せるかを檢し、その間少しく余が考へるところを述べてみようと思う。よく言う文章もある代わりに、悪く言う文章もある。これは作者めい／＼に十分がまんをして聞いてもらいたい。それと、二十三号から三十四号までが満一箇年であるが、二十三号には文章がないから、これを除いて、最近の三十五号を加へる。読者諸君は、どうか本誌の一つ／＼を前へ置いて余の言うところを聞いてもらいたい。短評を加へる文章を眼前に置いて見なければ、さらに要領を得まいと思うからである。

二十四号には、長瀬薫二郎君の「雪の朝」がある。本誌の文章としてはわずかに曙光を放つたものである。草創の際に属してゐるためか、遺憾ながらまだ及第にはほど遠い。三十五号の染谷森雄君の「雪の朝」と比較してみると、文章というものの價値および文章を作る者の目の着けどころがどうであるかということがわかるであらうと思う。長瀬君のためにもならうと思ふから、氣の毒の感はあるが、この一編の最後に比較詳論してみようと思ふ。染谷君のは傑作である。文章は二箇月絶えて、二十七号の「日記合わせ」になる。坂入久雄君のは、同君の將來は何かができそうに思われるだけで、取り立てて言うほどのことはない。大槻五郎君のも佳作と稱するわけにはいかぬが、他人の模倣を許さぬところがある。「三、四人の子供が、帯のような流れの底へ小さな足模様をつけて、めだかを取っていた。」というあたりがそれである。これは大槻君の手がらである。なんでもないことでも、よく見ればこういうふうにおもしろくなる。足で模様をかくなどということが最もよく子供に適した写し方である。作者はそれほど思つて書いたのではないだろうが、實際をよく見たからできたのである。写生の貴

重なのはこゝである。それで、こういうちみつな観察が号を重ねるにしたがつて発達して行っているから愉快である。とにかく大槻君のは模倣しがたいところがある。せんべいのところも結末をつける手段としていい。だが、よほど注意しないと下品になる。長瀬君のでも坂入君のでも、実際を見なくてもだれにでもできそうな文章であるのが、物足らぬところである。

二十九号の「わが庭園」。大久保甫一君のはうまい。金魚も紅ほと、ぎすもよい。「築山に登ると、赤い鳥居がすぎの間から見える。」という段になると、机の上で考えたのではできがたいものになっている。他人が漫然筆をとったとてとうてい及びもつかぬという点が文章の生命である。大久保君のこの文章あたりから、ようやく本誌の文章も物になりかけている。しかしまだ足らぬ。

暑中休暇のあとの三十一号は著しい進歩を示しておる。藤島琴夫君の「日誌の一節」、佐藤政雄君の「忙しき一日」、坂入久雄君の「雨後」、この三編、みな振るっておる。藤島君の朝顔の花などもおもしろいところをとらえた。文中、弟と妹とが書いてあるが、なんだかこの朝顔の花も、弟と妹とを相手にうち興じたように推察されてなつかしい感がある。虫干しのところもいい。文章の結末をつけるためには必要なことである。文章ははじめよりも終りが力のこもったものでなければならぬ。これは必然の法則である。佐藤君の「忙しき一日」、これはまた筆路の暢達した、相應に変化のある、まとまった文章である。養蚕の忙しさが目に見えるようである。しかし、上簇のところだけではあまり普通で、またあまり單調に失する。だが、作者はそんなまずい手段には終らなかつた。そこへせみ取りをはさんだのは、この單調を破って文章に幅も奥行もこしらえている。大手がらである。それで、そのせみ取りもなか／＼よくかいてある。作者が一編の結末をつけるには、再び養蚕のことが出している。

注意が深いと言っている。口のまわりを黒くして食べた祝いのちも、適切であり、軒ばのきり／＼すで、せみ取りの結末までつけてある。一編の結構ということを作者がそれほどに思ったかどうか知らぬが、終始りつばなものであつた。坂入君の作は、実は前の二編はいすれもまずかつた。しかし、「雨後」の一編では、余は全く驚かされた。材料のとらえどころが実にうまい。そうして筆路にちつとも澁滞がなく、標題の雨後のごとくしつとりとして、味がある。筆をとる時分、よほどまじめであつたと推察する。本誌の文章にもどうも氣取つた浮かつた語句の見えることがあるが、実にいやな感じがする。文章を書く時には、どこまでも文章そのものに対して尊敬の態度を失わぬようにしなければならぬ。りこうぶつた口吻や、人を茶化したような、あるいは自分の頭のない、悟りめいたようなことを言つたりするのは、大の禁物である。そういう点についても、この一編は注意すべきものと思う。それで、牛の姿態・動作の写生がちみつに、遺憾なく發揮されておる。田野の雨後がよく現われておる。短文だけに、はじめから終りまでみなうまい。せみの声がこの短い文に相應して、ちゃんと結末をつけておる。坂入君の以前の文章は、あまり概括的であつた。「雨後」はおもしろい一部分をとらえて細叙しておる。その相違が文章の價値に著しい相違を示しておるのである。

写生文家はだれでも知っていることであるが、写生文はある天然・人事を写生する文章で、その天然・人事を読者の眼前にほうふつせしむるためには、精細の描写を要する。精細に描写するということは一方極端に省略することである。すなわちむだな部分を省くことである。むだな部分を省いて必要な部分に力をこめるから、いいところはますますよく見えるのである。むだな部分を省かなければ、一編錯雜してよい部分が悪い部分におゝわれてしまう。読者は倦怠の念を起す。まずむだを省くとい

うことが、作文の第一階梯である。

以上三編、みな帰省中の写生であることが、すこぶる注意を要する。比較的單調な学校生活から放たれて故郷に帰れば、周囲がみな新しい刺激を興える。すべてを興味をもって見る事ができる。一方から言うと、材料がみな珍しいものになっておる。心に興味を感じて珍しい材料をかくから、できたものがおもしろくなるのである。写生は一つは材料によるというのは、こゝである。三十四号の文章のごときも、旅行という新たな刺激で、あんな傑作ができてゐる。学生の在学中は、自然の約束で各科平均に勉強しなければならぬから、文章をもつばらにすることはできないが、暑中休暇とか修学旅行とかいう特別の場合には、その心持でいけば、結果は必ず刮目して見るべきものがあるはずである。三十三号、外池達之助君の「郊外」、非常にたっしやな筆である。しかし、前半は概括的で錯雑しておる。あまり材料を排列し過ぎておるからである。「山腹に切りもちを干したようだ。」という筑波の町の形容はうまい。後半、牛小屋のところは、秋晴れののどかな感じが十分に敬服する。人がいないようであったところなど、絶妙である。この一編も、前段に言ったごとく、むだをもっと除けばよかつたのである。「平和の色があふれて見える。」とか、「いかに平和と詩趣とに満たされたながめであろう。」とかいう言い方は耳ざわりである。牛小屋の光景を自分が興味をもって細叙すれば、平和な感じも、のどかな感じも、読者は十分に味わうことができる。読者がせっかく恍惚としてゐるところへ、不調和にも平和とか詩趣とかいう悟りめいたことを言われると、俄然として興がさめてしまう。どうかすると、中学生などは、徳富蘆花の自然を写した悟りめいた文章にかぶれたがる弊がある。諸君は、まだあんなことをするがらではない。たゞまじめに写生すべきで、ほんとうにまじめになつておれば、

才走つた文句などが出るはずはないのである。單に文章としては、諸君の傑作は、徳富蘆花の自然を写した文章よりもおもしろい。確かにおもしろい。じょうずなのではない。おもしろいのである。そこのおもしろく読ましめる秘訣といへば、たゞ、自分が非常におもしろく感じたことを、まじめに、本氣になつて書くこと以外に何もないのである。

三十四号の文章は、特筆するに十分な價値がある。柴準平君の「箱根越え」、橋詰倭文雄君の「中禪寺湖」、外池江山君の「峠道」、みな傑出しておる。「箱根越え」の、静岡縣の木標を見たところなどは、眞情があふれていていい。だれも注意せぬようなものでも、作者がおもしろく感じ、それをそのまま、言い表わせば、すぐにおもしろいものになるというのが、これでわかるであらう。寄せ木細工の形容も、山腹の畑地を言い盡くしておる。とうもろこしを極力描いたのもまことにいい。むだを省いて、必要な部分を極力精細に描けというのは、こゝである。結末の牛もいいが、もつとすなおに言う方が、更にいい。これでは少しこしらえものらしくてまじめの氣が乏しい。「突然うしろから追いかけるような牛の聲が聞えた。驚いて見ると、まだらな大牛が首を低いかき越しに突き出して、小さな目を光らして、こちらを見ていた。」というようにしたら、いやみが少なくなるだろう。短歌のごときものになれば、文字がきわめて少ないだけ、たゞ一字が一首に非常な影響を及ぼす。「箱根越え」のごとき短い文章になると、たゞの一句が全体に大なる關係を及ぼす。どこまでも語句は謹慎して使用せねばならぬ。少しでも浮かつてはいかぬ。「小さな目を光らした。」という一句は、非常によい。「中禪寺湖」傑作である。一体によくこなれて、澁滞したところがない。戸をあけて湖水を見たところでも、顔を洗うところでもいい。ことに英國の海軍大佐が乗ったボートなどをとらえたのは、中禪寺湖を動かないものに

してしまった。船頭が英國大佐の死んだあたりを説明したなどというところも、前のボートを生かしておる。そうして中禪寺湖そのものを生かしておる。前の船とあとの船とが見えるばかりで、その音が霧の底から聞えるというあたりも、読んでしんとして来るような感じである。英國大佐の死というような話は、その霧を更に心細くさせるので、この使い方ははなはだ巧みである。橋詰君は、そんなことを思つて書いたのではないだろうが、實際を注意して、それが頭に残ったから書いたのだろう。この、實際を疎略に見ないということが作文の秘訣である。結末を船頭の言でとめたのもよろしい。「峠道」、作者のたっしやな筆つきはこゝに至つてますます發達している。筆つきがなだらかで、読むにちつとの苦痛もない。雨の注ぐくまざさでも、霧のひまから見る紅葉でも、ゆかしくさくやく水の響きでも、みな読者の心をひく。たっしやという点においては「箱根越え」でも、「中禪寺湖」でも、その敵ではない。しかし、その實質から言つと、「峠道」は劣つておる。要するに「峠道」は、峠道そのものが霧で変化を發見しにくかつたかもしれぬが、文中どこかといつてべつだんに力のはいつたところがなく、あまりに平板である。「箱根越え」や「中禪寺湖」には、かくべつに目につくところがある。すなわち「やま」と稱すべき点がある。こう言つと「峠道」はまずいのかというにそうでない。「峠道」は傑作である。余は、外池君の才筆を惜しんで、ことさらに苦言を呈するのである。たっしやな者は、どうかするとたっしやに任せて書き過ぎる。本誌の文章でも、四年、五年に佳作が絶無で、一年、二年あたりに傑作のあるものも、一方はたっしやで書き過ぎるのと、一方は本氣にまじめになつてゐるのとの區別から来る現象である。今傑作を出した諸君でも、たっしやになるにしたがつて、このまじめな態度を失うようなことであつたら、きつと文章は見られなくなつてしまふ。以上、暑中休暇以後の作品は、各作者特

有のものになつて、他人が机上でひねり出すことの絶対にできないものである。余はこの現象が愉快でたまらない。三十五号の染谷森雄君の「雪の朝」を評して、本編を終ることにする。

二十四号の「雪の朝」と比較してみると、染谷君のは語句が自然に出ておる。「いつもは七時ごろまで床の中にむぐつているばく……起きずにおられない。」この言い方は佶屈で、そうして不自然である。「だいふ寒い朝だと思つて起きてみると、思ひがけない雪である。」これはすら／＼としてきわめて自然である。なんてんでも、染谷君のは簡潔に敘してあつて、そのあとへ全く自分の働きから出た松の雪を書いてある。松のこすえにすゞめのとまつておるだけでは普通であるが、雪が屋根のようだと、うので生命がある。鬼怒川の土手のあたりもうまいが、雪に足あとのないところや、つぐみなどがことにいい。長野の鐘も結末がうまくできている。染谷君の「雪の朝」は、全く染谷君が、その境にあつたからはじめてできたので、文章はそこにならなければならぬ。三十四号のは修学旅行のあとだから傑作が出たのかと思つたら、すぐまた「雪の朝」のようなものに接するのは、諸君の進境を十分信じていいことと思ふ。ことにこの「雪の朝」が即題だというに至つては、三嘆敬服する。

以上のほかの諸君のでも、注意すべき作品はあるようであるが、しばらくこゝには言わぬ。筆をおくに臨んで、余は諸君の天然描写の進境を祝して、天然を愛し、天然を楽しむ者の幸福であることを告げたいと思ふ。いかなる食物もうまく食える人は幸いである。それは、胃の消化力が旺盛だからである。しかし、その消化力を常に旺盛ならしめるには、適度の運動を要する。他人の顧みぬ天然の現象をも常に愉快に見ることのできるものは、強健の胃を持つておる人が食物に對するようなものである。それで、自ら天然の趣味を更に養つて行く必要がある。諸君は各科にわたる勉強の余暇に、十分天然を

味わうことができるはずである。天然は寸時もわれ／＼を離れないものである。(長塚節全集)

忙しき一日

第一年級 佐藤政雄

養蚕はきのうから上簇が見えて来た。けさは、よほど透いて見えるのであるが、あいにく雨で、寒暖計は七十度にくだっている。あまり冷気過ぎるというので、雨戸を締める。火をたきつける。

しばらくたつと、あがる虫が、かごのへりに添って二面にわいて来た。さあ、これからが忙しい。母と祖母が虫を拾う。父は額から豆粒ほどの汗を落しながら、まぶしを作る。かごの上にわらを敷き、なわを作り、更にその上にいなすま形に折り曲げたわらを置くときあがる。余は、母から虫を受け取って、その上に載せてやる。子はまた、そのかごを持ってたなにさす。

正午ごろから雨はやんだ。いやにぼやついて来た。食休みをしていると、裏の八公と隣の芳坊とが、竹のさおに紙の袋をつけて、せみ取りに来た。せみの声は、門のしいのこすえからもれて来る。ふたりは足音をさせぬように、そく／＼としいの下に行った。その腰つきがおもしろい。芳坊は少し離れて八公の方を見ている。八公はこすえの方を仰ぎながら、竹のさおを出していたが、急に、変な顔をして、「やあ、雨が降って来たぞ。」と言う。せみはすでに飛んでしまった。芳坊は、「罰みるやる。」とかなんとか言って笑っている。八公はせみに小便をかけられたのだ。

暮は、夕方までに百枚ばかりあがった。残っているのは、三枚しかない。まぶし祝いのもちができて、みんな、舌つゞみを打ちながら、口のまわりを黒くして食べた。軒ばには、芳坊がくれたきりすが、涼しい風に吹かれながら鳴いている。

雨 後

第一年級 坂入久雄

朝の間から、糸のような雨が降っていたが、書ごろからやんだ。父に言いつけられて、牛小屋から

牛を出して、草を食わせに裏の流れの方へ出かけた。牛は、細いしっぽを振りながら、先になって行く。どういものか、道のへりの方ばかり通る。草のたくさんある所に出ると、遠慮なく食いはじめる。たるんでるのどの皮がたぶ／＼と揺れる。時々、黒い舌をべろ／＼と出す。青い草の茂った所に、まだらな牛の立っているのは、まるで絵のようだ。雨あがりのいなかは、ことに物静かで、しっとりとなれた小石までも趣があるように思われる。向こうの森からはせみの声などが聞える。

研究

- 一 文章の分類のしかたには、どんな種類がたえられるか。
- 二 一言文一致文に対しては、どういう種類の文章があるか。
- 三 写生文・議論文・説明文のほかにはどんな種類の文章があるか。
- 四 文章を作る上にはどんな心構えが必要か。
- 五 作文の秘訣(かんどころ)にはどういうところがあげられるか。
- 六 作文と「天然の趣味」とはどういう関係があるか。
- 七 作者が文語的な言い方や方言的な言い方

五 文章の作り方・なおし方

しているところを調べて、現代標準語の言い方になおしてみよう。「ない」の意味の「ぬ」とか「いる」の意味の「おる」は、その一例である。

- 八 この作文の方言を、その意味を前後の語句によって判断して標準語になおしてみよう。
- 九 自分の書いた作文をなおす時には、どういふ点に注意したらよいか、文字や書きぶりにとまららないで、見方や考え方の足りないところを改めるようにしよう。
- 十 人の作文をなおす時には、どういう点に注意したらよいか。たゞあらさがしをするので

はなく、よいところを発見して、そのよさを学ばようにしよう。

十一 文字やことばづかいを直すのには、どう
いう注意が必要であるか。

十二 かなづかいが現代かなづかいになったの
で、かなづかいを一々辞書で引いてみる苦労

はなくなった。しかし、現代かなづかいはま
たやはり一種のかなづかいであるから、その
法則や、一つ／＼の語の表記法をよくおぼえ
ておこう。もちろん、現代かなづかいは、現代
語音によるものであるから、現代語音をはっ
きりさせておこう。

〔三〕 うさぎのみ

谷崎潤一郎

悦子はまゝごとにも飽きてしまうと、お花に言いつけて二階のへやから帳面を持って來させて、宿願のつづり方を書いていた。

夕方、表のベルが鳴ると、悦子は鉛筆をほうり出して迎えに出たが、約束のおみやげの包みをさげて應接間へはいつて來たおばの雪子のあとから、自分も飛んではいりながら、

「見たらいかんよ。」

と、あわてて帳面をテーブルの上に伏せた。そして、

「おみやげ、見せて。」

と、すぐその包みを引つたくって、中のおもちゃを長いすの上に並べた。

「ありがとう、ねえちゃん。」

「このことやる。」

「ふん、これやわ。ありがとう。」

「もうつづり方書けたのんか。」

「いかん、——いかん……。」

悦子は帳面を取り上げると、両手でひしと胸に抱きしめるようにしながら、向こうの方へ飛んで行った。

「——これ、ちょっとわけがあるねん。」

「何やのん。」

「うふ……、——これなあ、ねえちゃんのこと書いてあるねん。」

「書いてあったかてええ。見せなさい。」

「あとで、——あとで見せる。今はいかんねん。」

悦子はそのつづり方は「うさぎのみ」という題で、ねえちゃんのことかちょっと出て來るのだと言った。そして、今見られるときまりが悪いから、自分が寝たあとでゆっくり見て、まちがっているところがあったらなおしておいてほしい。自分はある朝早く起きて、学校へ行く前に清書するからと言うのであった。雪子は姉の幸子たちがどうせ映画館か何かへまわって、帰りがおそくなることわかっていたので、夕飯を済ますと、悦子といっしょにふろにつかかって、八時半ごろに寢室へ上がった。

時々肩を凝らす雪子は、今夜もひどく凝って來て寝られないので、まだ幸子たちが歸るの間には間があると思っただけでも、ちょうどその間にあのつづり方を見ておいてやらなければと、よいあんばいに眠ったらしい悦子の寢息をうかゞいながら起きて、まくらもとの電燈のスタンドの横に置いてある

うさぎのみ、

私はうさぎをかっています。このうさぎは、ある人が「おじょうちゃんにさしあげます。」といつて、もつてきてくれたうさぎです。

私の家には犬やねこがいますから、うさぎはべつにして、げんかんにおいてあります。私はまい朝学校へ行く時に、きつとそのうさぎをだいて、なでてやります。

この前の木よう日のことでした。朝学校へ行く時にげんかんへ出てみしたら、うさぎのみ、が、一つだけびんと立っていて、一つはよこにおいていました。私は「おや、おかしいな、そっちのみ、も立ってなさい。」といいましたけれども、うさぎはしらんかおしています。私は「そんなら私が立ててあげよう。」といって、手で立ててやりましたが、手をはなすと、すぐまたぱたりとたおれてしまひました。私はねえちゃんに、「ねえちゃん、あのうさぎのみ、を立ててください。」といいましたので、ねえちゃんは足でうさぎのみ、をつまんで、立てておやりになりました。しかし、ねえちゃんが足をおはなしになると、そっちのみ、はまたぱたりとたおれてしまいました。ねえちゃんは「おかしなみ、ですね。」とおっしゃって、おわらいになりました。

雪子はあわてて、「ねえちゃんは足でうさぎのみ、を……」とある「足で」の二字を鉛筆で消した。悦子は学校でもつどり方はよくできる方なので、この文章などもうまく書けていた。雪子は、どこ

も文章としてまちがったところはないように思ったが、当惑したのは、この「足で」の処置であった。彼女は、「ねえちゃんは足で」から以下「たおれてしまいました。」までを次のように訂正した。――

……ねえちゃんもうさぎのみ、をつまんで、立てておやりになりましたが、ねえちゃんそののみをおはなしになると、またぱたりとたおれてしまいました……

「足で」の代わりに「手で」とするのが一番簡単であったけれども、実際あの時は足でしたのに違くないので、子供にうるを書かせてはならないと考えた結果、いくらかあいまいに取れるように、こう書きなおしたのであったが、これが自分の知らないうちに学校へ持って行かれて、先生に読まれてもしいたらと思うと、彼女は心の奥の方でひやりとした。そして、それにしてもとんだところを悦子に書かれてしまったのが、なんだかひとりおかしくもなつて来るのであった。

この「足で」の由来を物語るところなのである。

蘆屋あしやの家の隣家、というよりは背中合わせの庭続きになっている家に、半年ほど前からシュトルツというドイツ人の一家が移つて来て住んでいた。両家の庭の境界には、目のあらい金網のかきかめぐらしてあるだけだったので、悦子はじきにシュトルツ氏の子供たちと顔見知りになり、最初のうちは金網を隔てて、動物が互のにおいをかきあうように鼻を寄せつけてにらみあっていたが、間もなく双方から金網を越えて出入りしはじめた。ドイツの子は上がペーターという男の子、次がローゼマリーという女の子、下がフリッツという男の子で、一番兄のペーターが、見たところ十か十一、ローゼマ

リーが悦子とちようど同じぐらいの年かっこうをしていたけれども、西洋の子供は大がらであるから、実際の年はもう一つ二つ下であるらしかつた。悦子はそのきょうだいたち、わけてもローゼマリーとなかよしになって、毎日学校から帰って来ると、庭のしばふへ誘い出して遊んだ。ローゼマリーは悦子のことを「えつこ、えつこ。」と呼んでいたが、だれか注意する者があつたとみえて、まもなく「えつこさん、えつこさん。」と呼ぶようになり、悦子はローゼマリーのことを、親や兄弟たちが呼ぶ「ルミー」という愛称を使って、「ルミーさん、ルミーさん。」と呼んでいた。

ところで、シュトルツ氏の家にはジャーマン・ポインター種の犬と、ヨーロッパ種の全身まっ黒なねことがいたが、そのほかに、裏庭の方に箱を作つてアンゴラうさぎを飼っていた。悦子は犬やねこは自分の家にも飼っているので珍しくはなかつたけれども、うさぎは珍しいので、よくローゼマリーといつしよにえさをやったり、耳を持って抱き上げたりしていたが、やがて自分もほしくなつて、うさぎを飼つてくれるように母の幸子にせがんだ。幸子は動物を飼うのはよいが、扱い慣れないものを飼つて死なしてしまうとかわいそうであるし、犬とねこでもいいかげん手がかかるのに、そこへまたうさぎが来ては、えさをやるだけでもやっかいであるし、第一、犬やねこに食ひ殺されないように囲つておくといつても、この家にはそういう適当な場所がないしするので、ちゆうちよしてると、出入りの煙突そうじの男が、これをおじょうちゃんにあげてくれと言つて、どこからかうさぎを一匹持つて來た。もつとも、アンゴラうさぎでない、たゞのうさぎであつたが、まっ白な、きれいなうさぎではあつた。悦子は母たちと相談して、結局犬やねこから隔離するには、玄關の土間が一番安全だといふことになつて、そこに置いて飼うことにしたが、うさぎはたゞ赤い目を見開いているだけで、何を

話しかけてもまるきり手ごたえがないので、犬やねこはだいが違ふといふやうなあと言つて、おとなたちはみなおかしがつた。そして、どうしても犬やねこのように人間が添はず、人間とは全く関係のない、何かびく／＼した奇妙な存在であるという感じしかわかなかつた。

悦子がつゞり方に書いたのはこのうさぎのことなのであつた。雪子は毎朝、悦子を起して朝飯の世話をしやり、かばんの中を調べた上で学校へ送り出してやるのであるが、その朝、玄關まで送つて出ると、悦子がしきりにうさぎの一方の耳を持って、立てようとしていた。そして、いくら立ててもその方の耳が立たないので、「ねえちゃん、やってみてえな。」と言つた。雪子は悦子を遅刻させないために、早く手傳つて、立ててやろうと思つたけれども、そのぶ／＼した物に手を触れるのがなんとなく無氣味だったので、たびをはいっている足を上げて、おやゆびのまたに耳の先をはさんでつまみ上げた。が、足を放すと、すぐまたばかりとうさぎの横顔の上へその耳がたれて來るのであつた。

「ねえちゃん、なんでこゝいかんのん。」

悦子はあく朝、つゞり方がなおされているのを見たと言つた。

「いややわ、悦ちゃんは。足でしたいこと書かんかて、ええがな。」

「そんでも、足でしたやないの。」

「そら、手でいろいろたら氣味が悪いよつてに——」

「ふん。」

と言つたが、ふに落ちないらしい顔つきで、

「そんなら、そのわけ書いたらええやないの。」
 「そうかて、そんなけつたいなかつこうしたこと、書けますかいな。先生が読まはったら、えらいぎょうぎの悪いねえちゃんや、思やはるがな。」
 「ふん。」

悦子はそれでもまだよくのみこめないらしかった。

(細雪)

研究

- 一 この作文のなおし方をどう思うか。
- 二 作文には絶対にうそを書いてはいけないかどうか、みんなで話しあってみよう。
- 三 ローゼマリーは、どうしてはじめに「えつこ、えつこ。」と呼んでいたのだろうか、また、あとで「えつこさん、えつこさん。」と呼び方を変えたのであろうか。
- 四 ローゼマリーをルミーというような言い方が日本にもあるか。日本の愛称には、どんな
- 言い方があるか。
- 五 廣く一般に人の名まえの呼び方を考えてみよう。
- 六 人を紹介する時、紹介される人の、どちらが長上であるかによって、どちらから先に、どういう呼び方をして紹介するか、紹介のしかたについて調べてみよう。
- 七 大阪方言を、その意味を前後の語句から考えて、標準語に改めてみよう。

〔四〕句読点

薄田泣菫

文章を書く者にとって、句読点ほどおろそかにできないものはない。合衆國政府は、この句読点

つで二百萬ドル損をしたことがある。

いつだったか、同國の政府が、外國産の果樹をなるべくどっさり移植して、こうしたくだもの供給であまり外國に金を拂いたくないというので、外國産の果樹輸入は無税にするという海關稅法をこしらえたことがあつた。バナナやみかんを安く食おうというには、こんな結構な規則はめつたになつたが、かんじんの法文を印刷する場合に、どうまちがつたものか、外國産の果樹、「フォリン・フルー・プラント」「Foreign fruits plant」ということばの中にコンマが一つはさまつて、「フォリン・フルーツ、プラント」「Foreign fruits, plant」となつてそのまゝ世間に公布されてしまつた。さあ、政府では外國産のくだものを無税にしたというので、みかんやぶどうやレモンやバナナというようなくだものが、大手を振つてどん／＼はいつて來た。それと氣づいた政府が法文を訂正するまでには、關稅の收入がいつもよりざつと二百萬ドル少なくなつていたそうだ。

句読点といへば、ある時、近松門左衛門のところに、かねてなじみの數珠屋が尋ねて來た。そのおり、門左は鼻先にめがねをかけて、自作の淨瑠璃にせつせと句読点を打つていた。數珠屋はそれを見ると、急にきいたふうなことが言つてみたくなつた。

「何やと思うたら句読点かいな。そないなもの漢文には、いるかもしれへんが、淨瑠璃にはいらんこつちや。つまり暇つぶしやな。」

門左はひどくしゃくにさわつたらしかつたが、そのおりはたゞ笑つて済ました。

それから二、三日過ぎると、數珠屋あてに手紙を一本持たせてやつた。數珠屋は封を切つて見た。手紙は數珠の注文で、中に、こんな文句があつた。「ふたえに曲げてくびにかけるようなじゆす。」

数珠屋は、「二重に曲げて、首に掛けるような」とはすいぶん長い数珠をほしがるものだと思つたが、さっそくそんなのを一つこしらえて持たせてやった。すると、門左は注文書きに違ふと言つて押し返して来た。

数珠屋はかのようにまっかになつて、しわくちな注文書きをつかんで門左のところにてかけた。門左はじろりとそれを見て、言つた。

「どこにそんなことが書いてあるな。二重に曲げ、手首に掛けるような、とあるじゃないか。だからさ、淨瑠璃にも句読点があるというんだよ。」

(茶話)

研究

一 「Foreign fruits plant」では、「外國産のくだもの」と外國産の植物」との意味になるというのであるが、國語にもこういう例があるか、实例について調べてみよう。

二 数珠屋のきいたふうなことを標準語になおせば「何かと思つたら、句読点か。そんなものは、漢文にはいるかもしれないが、淨瑠璃にはいらぬことだ。つまり暇つぶしだ。」となる。こんな時、このように、簡単に言つて

しまつてよいか考えてみよう。

三 句読点(くぎり符号)には、。(まる、しろまる、句点)、。(てん、読点)、。(なかにん、くるまる)があり、ほかに「」(かぎ)、『』(ふたえかぎ)、() (かっこ)、() (よこがっこ)なども含まれる。なお、？(疑問符)、！(感嘆符)、—(ダッシュ)、…(てんく)、(つなぎ)、(つなぎてん)、(わきてん)、——(わきせん)なども含めて考えて

よい。これらの一つ一つの用法は、國語科の教科書などでよく研究しておぼえておこう。

四 國語の文章には、横書きのものがある。横書きは、句読法に違いがある。英語の文章の句読法などと比較して研究してみよう。

五 句読点は、文章の調子を示すためや、適当に切つて読めるようにするためや、前後のことの続き方をはっきりさせるために打つといわれているが、かな書きの多い文章では、ことばの切れ目を示して読みやすくするためにも打つことがある。

六 國語の符号には、句読点のほかにおどり字

(くりかえし符号)がある。おどり字には、(一つ点)、(くの字点)、(同の字点)、(二の字点)、(ノノ字点)がある。これら一つ一つの用法は、國語科の教科書などでよく研究しておぼえておこう。

七 句読点の打ち方で、文章の意味の取り方を誤つたような経験を思い出してみよう。

八 また、句読点の打ち方で、文章の意味の取り方を誤まれたような経験を思い出してみよう。

六 編集と学校生活

編集作業

われわれの生活から新聞がなくなつたらどうだろう。習慣として新聞を読む人が、なんとなく手持ちぶさたで困るといふとどうだろうか。

新聞を通じて、遠い世界の一隅に起つたことが、きわめて短い間に報道される。ひとりひとりの力

世界とわれら



ではどうしても得られないニュースが、組織の力によって敏速に傳達される。われわれは新聞を通じて、われわれが直接知ることのできない複雑な社会の動きを察し、すぐには聞くことのできない外國の人々の意見を知ることができる。そしてわれわれが生活している社会は、せひとも、それらについてわれわれのひとりびとりが知っていないければならないほど、深いつながりを持っている。

もしわれわれの生活がわれわれだけの力で営まれ、もしくは近隣の人たちだけの協力によって事欠かないものであれば、特に新聞などの必要はないであろう。新聞が生まれて来たのは、人間の生活が、そうでなくなったからである。新聞が発達したのは、人間生活の社会的関連が緊密になって来たからである。今日、新聞はわれわれにとって火であり水であり光である。

今日の社会では、世論が重んぜられる。世論にもとづいてすべてのことが行われる。世論は正しい

くなければならぬ。どうすれば世論が正しいものとなるか、世論の基礎はわれわれひとりびとりの考えである。われわれが正しく物を判断し、しっかりした意見を持つためには、日々起る事件の数々、また現在行われている政治的施策の實際が、正しく、ゆがめられることなく報道されていなくてはならない。その上、社会の急激な変化は、これらの報道の敏速なことを求めている。いかに正しい報道もそれが遅延する場合には、その價值は大いに減じてしまう。正しいことと早いこと、この二つが新聞社のモットーでなければならぬ。新聞のよしあしも、この点から判断されるであろう。

次に新聞の持つ大きな力について考えてみよう。同じ内容の新聞が、高速度の輪轉機によって、たちまち幾十百万と印刷される。一夜のうちに社会のすみずみまで配布される。読者は待ち望んでいる。こういう事情のもとにあつて、新聞の社会的影響力はほとんど想像を絶するものがあるであろう。かくして新聞は事実を報道して世論を反映するとともに、強力に世論の構成に働きかける。もしも、新聞が社会の公器であることの自覚を失つた場合、その持つ力が大きければ大きいほど、社会に対する害毒には恐るべきものがある。ある集團が他の集團に対して支配的な権力をほしいままにした封建社会にあつても、新聞が発生し、それがある程度の発達を見たのも、ひとえに、その支配者たちが新聞の持つ偉大な影響力に目をつけて、自分たちに都合のよい社会の機構の保持に努めた結果である。この場合、新聞をほんとうに必要とし、利用したものは、一部の支配者たちであつて、多数の民衆ではなく、新聞は、いまだその本来持つべき性質にまで高められていなかったと言わなければならぬ。

ところが、今日の社会は、いわゆる民主主義の社会である。相互の理解に基礎を置くこの社会のしくみは、その本質的な要求として、よい新聞を必要とする。こゝにはじめて、すべての人に支持され

利用される正しい新聞が生まれて来るのである。新聞のほんとうの発達も、この社会組織の中にあつてはじめて期待できると言うべきである。

さて、われわれの学校でも、学級として、または学校として新聞を作る。あるいは文集を編集し、校友会の雑誌を作る。しかし、学校新聞には一般の新聞や雑誌と、少しく異なつた性質が考えられはしないか。なるほど学校という社会での相互通信の機関でないことはなく、したがつて、前に述べた世の中の新聞の持たなければならぬ当然の責任は、学校の編集物にあつても、そのまゝ適用されなければならぬが、学校内で起ることがらば、一般社会のそれとは違つて、まずだいたいは、全校友に直接関係を持つことが多く、だれでも知っているので、一々それを事実として報道する必要はそれほどないとも言える。こゝでは、それらの現象とともに、むしろその現象の一つ／＼に対して、みんながどう考え、どう判断し、どう処置すべきかの意見の調査などが記事の大部分を領してもさしつかえないことにもなるであろう。具体的なこととともに、そのようなできごとが生まれて来る原因であるわれわれの生活態度や、今後に対する対策といったものについてのみんなの意見も大きな問題となつて来るであろう。また一面、感情が率直に表現される文藝的作品を通して、お互の融和をはかり、学校生活を楽しいものにする点にも大きな努力が拂われてよいであろう。すなわち、記事・社説・文藝欄などに、学校新聞独自のくふうが必要となるであろう。

学校新聞・校友会雑誌・学級文集などを学校で編集することは、学校生活をみんなにとつて楽しいものにするのを目的とするとともに、その仕事を通じて、新聞や雑誌などが、いかにして編集されるかを実際に学び、更に新聞のよしあしや雑誌の長所・短所に対し、健全な判断力を持つようになることを目的にしている。また同時に、作文の能力をみがき、自他の作品を比較することによつて作文に興味を持つようになり、知らず知らずのうちに、その力を身につけるようになることも期待している。一つの仕事を共同で進め、ともに苦労し、ともに励ましあつて完成して行く楽しさも、われわれの学校生活を意義あらしめるものである。こういう仕事を機縁として、ほんとうの友情を感じ、終生変わらない協力が誓われるのも、決して夢ではないであろう。

学校新聞や文集には、いろいろの企画が考えられるであろう。編集物の目的や、その時の事情に應じて、くふうすべきである。このくふうにこそ、共同の、そして創造的な仕事の意義があるのである。

研究批評会

多くの人の共同作業である編集の仕事が続けて行くためには、クラスならばクラス員全部の関心が、常に新鮮で、建設的であればならない。ところが、仕事の分担が片寄つたり、一部の人が自分勝手な好みを強く出そうとして、ほかの人の意見を無視するようなことが重なり、とかくこの仕事の共同性が見失われ、大部分の人は無関心となり、孤立した編集員はいたすらに友の非協力を嘆かなければならないようになる。これではこの仕事の本來の目的にもあい反する結果となるわけであるから、十分注意しなければならない。

それでは、そういうことにならず、常に編集を有意義なものにし、一回は一回ごとにクラスの友情をかき立て、正しい意見が全体に重んぜられ、高い詩情がお互を暖めあうといったふうになるには、どうしたらよいであろうか。仕事の分担を、順番制によつてクラス全員に持ちまわるのも一つの方法であろうが、こゝには、編集の研究批評会を試みる方法について考えてみよう。批評会には、編集係・

投稿者、それから読者がそれらの立場から十分に意見を出して、その内容・形式の両面にわたって討議する。また、参考になりそうな材料は、すべてこれを持ち寄って、その次の編集には少しでも、よりりっぱなものが作られるようにみんなで研究する。このような批評会をくり返し持つことによって、次第にすぐれた編集が行われるようになり、所期の目的を達成することができるであろう。次に批評会の進め方の参考に資するため、一つの案を掲げよう。

一 まず次のことについて話しあう。

- (1) われ／＼の編集物(新聞・雑誌・文集)はどうして作られることになったか。だれの提案によるか。提案の理由について。
- (2) その提案に対してどんな意見があったか。
- (3) 提案が、みんなに支持され、みんなできめた編集目的は何か。
- (4) 編集のために、どんな組織を作ったか。それ／＼の役割をどうしてきめたか。
- (5) 名称はどうきめたか。そのいきさつ。
- (6) 費用についてはどうきめたか。
- (7) その他について。

二 次に編集に当たった人の話を聞く。

- (1) 編集会議について。
- (2) 編集の方針をどうきめたか。

(3) 仕事の分担方法。

(4) 参考にしたもの。

(5) 応募原稿についての感想と、その取り扱い方について。

(6) 体裁について。印刷方法・配分方法、または掲示のしかたその他について。

(7) 編集中に感じたこと。

(8) 完成した時の喜び。

(9) この仕事によって、はじめて気がついたり、わかったりしたこと。

(10) クラスまたは学校での反響に対する感想。

(11) 今後やりたいと思うこと。

三 次に、投稿者の意見を聞く。

(1) 投稿の動機、材料を得たところ。

(2) 編集全般に対する感想と希望。

四 読者の感想を聞く。

(1) おもしろかった記事・作品。

(2) 有意義だと思った記事・作品。

(3) ない方がよかったと思う記事。

(4) 編集全般に対する感想。

五 次に、いろいろの題目を掲げて、研究的な討論をする。たとえば、

- (1) 編集の方針について。
 - (2) 個々の記事または作品について。
 - (3) 見出しのつけ方や、割りつけの適否について。(一般刊行物と比較する。)
 - (4) この編集が、われわれの学校生活に役立ったと思われる点。
 - (5) この編集が、各個人にとって、どのような効果をもたらしたか。
 - (6) この編集のために拂われる労力や時間について。
 - (7) 今後改善すべき点。
- 六 最後に、先生の批評を聞く。

ほかの会議と同じように、この研究会でも、記録を取っておくことが必要である。次の編集方針をきめるにも、次回の研究会を開くにも、まず取り上げられなければならないものは、前の会議の研究事項であり、決定事項である。記録は、この意味からいっても、たゞ単に形式的につけるといふのではなく、要点をつかんで、簡潔に書くよう心がけよう。こうして、一つの努力が必ず次の仕事に役立っていることを、みんなが認めることができる時、はじめて、その仕事の一つに喜びが感ぜられるようになるであらう。

私たちの國語研究会

- 第一高等学校教授 市古貞次
- 東京女子高等師範学校教授 江湖山恒明
- 東京都立第一新制高等学校教官 佐藤正憲
- 白百合女子専門学校教授 松下宗彦
- 第七高等学校教授 松村明
- 千葉師範学校教授 山本茂男

Approved by Ministry of Education
(Date May 11, 1949)

昭和二十三年八月十七日 印刷
昭和二十三年八月二十一日 発行

私たちの國語一

定價 金十六円七十銭

著者

私たちの國語研究会
代表者 市古貞次

発行者

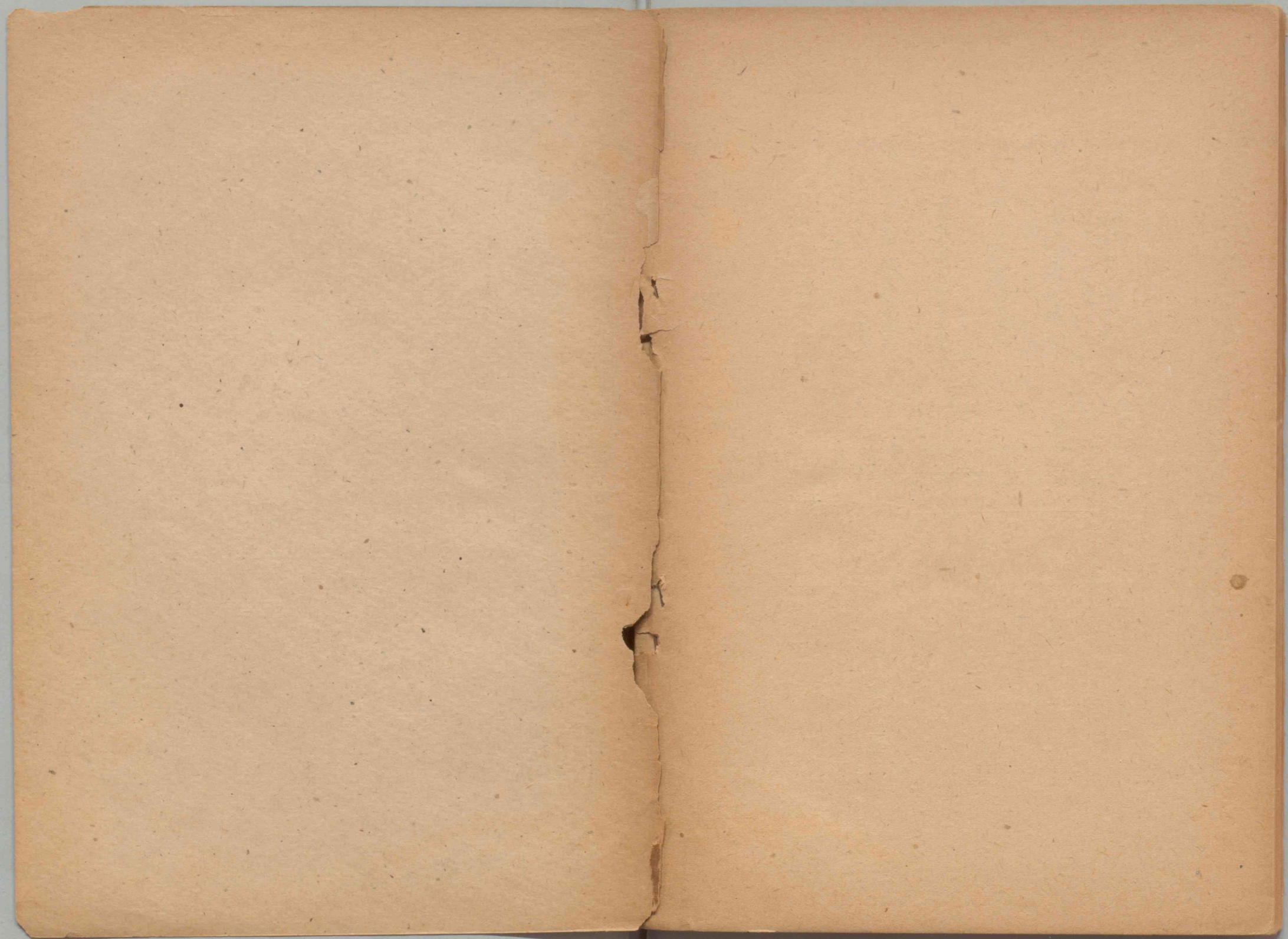
東京都中央区銀座七ノ四
株式会社秀英出版
代表者 有光次郎

印刷者

東京都新宿区市谷加賀町一ノ二
大日本印刷株式会社
代表者 佐久間長吉郎

発行所

株式会社 秀英出版
東京都中央区銀座七ノ四
電話銀座(57)六八二五番





広島大学図書

0130449613



秀文社出版